雪待ちの花

Akka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪待ちの花

【Ｎコード】
Ｎ７３８０Ｅ

【作者名】
Ａｋｋａ

【あらすじ】
世界に大きな二つの国がありました。長い間の不和を解消するために、両国は約束を取り交わします。すなわち、王子と姫の交換を―。相容れぬ思いを抱えた者同士、伸ばした手の先にあるものは？水の国の姫君と砂漠の国の王子が綴る物語。

流れ詩（前書き）

この話は、私がなろうサイト様で連載している「砂漠の蝶」と裏表の作品です。単体でもお楽しみいただけるようになっていますが、よろしければ拙作「砂漠の蝶」も読んで頂けると幸いです。

流れ詩

貴(とうと)き花は雪を想う　その賤しさ故に
美しき花は雪を想う　その醜さ故に

清き雪は花を想う　その穢さ故に
高き雪は花を想う　その低さ故に

花は愚直に雪を待つ　その身が枯れることを知りながら
雪は無様に花を待つ　その身が融けることを知りながら

触れ合うことさえ叶わぬのなら　囁き合うことさえ果たせぬのなら
この身に何の意味があろう　この世に何の意味があろう

花を愛すは人の業
雪を愛でるも人の業

花は花で無くなり　雪は雪であることを辞め
伸ばした先にあるものは　求め続けた至高の存在(もの)

これはいずれの記録にも残らず　いずこの書物にも記されない
忘れ去られた物語
これはいずれの記憶にも残り　いずこの旋律にものせられた
刻みこまれた物語

憎かりしかど

人のさざめきが近づいてくる。正確には、人々を騒がせるその元凶が。
今更それから逃れようとも思わないし、注意を払うことも無い。出来ることならこの部屋の前を通り過ぎて、どこか女官の部屋にでも篭っていればよいとさえ思う。
されどそんな願いは聞き届けられるはずも無く、いつものように足音は部屋の前で立ち止まり、断りも無く扉を開ける。
あまりに無礼な態度が咎められないのは、遠い異国の出身であるためか、その態度に慣れてしまったためか。
御簾の内からでも知ることが出来る、あまりに特徴的な容姿に思わずため息がこぼれる。感嘆のものではなく、負の思いをのせて。
「久しぶりだね、ユウコ」
遠慮なく御簾の内に踏み込んできた相手に、もはや非難する言葉も出てこない。
ユウコは脇息にもたれたまま、扇で顔を隠すことも無く相手を見据えた。
波打つ黄金の髪をまとめることも無く、着崩した衣装から覗く褐色の肌。
既に見慣れたものであるのに、いざ対面すると落ち着かない気分になるのは考えの読めない琥珀色の瞳のせい。
そんな自分の内面を覆い隠し、いつものように返答を。
「それ以上近づかれぬように。砂漠の王子」
表面だけを取り繕った言葉に本心で何を思ったのかは分からない。
しかしその琥珀の瞳を僅かに細めて、口元には嫣然とした笑みを刷く。

たとえ二人の間に流れる空気が、他人の様に冷たかろうとも。
決して相容れぬ思いを抱えているとしても。
二人の間柄は「夫婦」と言われるものに相違ない。

「随分なご挨拶だね。僕は君の夫だよ？」
くすくすと笑いながら、いつもと変わらぬ言葉が返される。
それに対して申し訳なく思っていたのは、一体いつまでだろうか。
おそらく互いが正体を現すまでのほんの短い間だろう。騙していたのはユウコだけでなく、相手も同様だった。
それを責める心算はまるでない。また、自責の念に駆られることも、決してない。
「ご冗談を。貴方の浮名は私の元にも届いています。最近は貴方に捨てられた泣き言を言いに来た者もいらっしゃった。どうせならもっと上手く立ち回ってくださいませ」
その事実だけでユウコが正妃としてどれほど軽んじられているかがわかる。
あるいはユウコがどれほど夫を軽んじているのか、だろうか。
「それは僕としたことが、面倒な女性に手を出していたみたいだね。で、ユウコはなんて言ったの？」
「私の知ったことではないと言う他に、何かありますか？文句は貴方に直接と」
「どうせならもっと打ち負かして欲しかったね。本当に僕のところに来たら厄介じゃないか」
軽薄が過ぎるその言葉に、思わず眉根が寄る。全く悪びれた様子の

無いこの男は、一体どんな精神構造をしているのだろうか。
「私は貴方がどれほど遊び歩こうとも一切関知しません。それは今後も一切変わりません。同様に貴方が散らした花がどうなろうと、私の知ったことではありません」
笑みはますます深くなるばかり。
何度も同じ会話をしても、何も変わらない現状に歯噛みするのも毎度のことだ。
しかしそれでも口に出さずにはいられないのは、ひとえにこの男の計り知れない価値のせい。
「それでも貴方が許容しきれない間違いを犯せば、両国の友好は消えることになりましょう。貴方の国に旅立った妹の存在まで無駄することは許せません、少しは自重を！」

にらみ合うこと、数秒。緊迫した空気を破るように、声がかかった。
「失礼いたします、姫様。お勤めのお時間でございます」
「わかりました。今いきます」
立ち上がろうとしたユウコの手が突然引かれ、体勢を崩して相手の腕の中に倒れこんだ。
腰が引き寄せられ、身体が密着する。染み付いた麝香の香りと、その中に仄かに香る自分のものではない女物の香。
「何を。御放しくださいませ！」
「行くの？君は僕と会話中でしょう」
「そんな台詞は会話が成り立ったときにどうぞ。私は貴方ほど暇を持て余してはおりません」
拘束から抜け出そうともがくユウコを片腕でやすやすと封じて、あいた片手で頤を捉える。
見つめるなんて生易しいものではなく間違いなく睨まれていることを意に介さず、薔薇色の唇のすぐ近くに、唇が寄せられた。
「……っ！いい加減になさって！」
幾重にも重ねた着物を脱いで、小袖と袴姿になったユウコは急ぎ距

離をとった。
相手の腕には空蝉が残ったのみ。
「ふざけるのも大概になさって。何がしたいのですか」
そんなことは本当は聞かずとも分かっている。
「何って、ねぇ」
相変わらず笑みを浮かべ続ける顔に、脇息でも投げつければ気が晴れるだろうか。
「姫様、お時間が…」
中の様子に戸惑っていたらしい女官が声をかける。どうせなら中に踏み込んで、助太刀なりなんなりすればよい。
「今参ります」
背を向けたユウコに、笑いを含んだ声がかかった。
「いらないの？これ。そのまま出て行くつもり？」
この上なく軽装であることは間違いないが、腕の中に戻るつもりはさらさら無い。
今一度強く睨み、ショウコは外で控える者に叫んだ。
「衣装を用意して！」
ますます笑っているであろう男を想像すると、腸が煮えくり返る。
これ以上ここにいるのは精神衛生上よろしくない。
そんなこちらの気を知ってか知らずか、追い討ちをかけるように声が届いた。
「神々によろしく、斎宮殿」
反応を返すことなく、ユウコは荒々しく戸を閉めた。

憎かりしかど（後書き）

読んでくださる方に最大級の感謝を。
よろしければご感想などお願いします。

憎かりしかど　２（前書き）

後半Ｒ１５注意です。ご不快な方は読み飛ばして頂いても、次以降話が通じるようにいたします。大きくスペースを開けてあるので、それを目印にしてください。

憎かりしかど　2

端的に言って、ユウコの立場は非常に複雑だ。
もはや誰がどこまで正しく把握しているのか分からないほど。それについてはユウコとしても、時の政府高官連中に罵詈雑言の限りを尽くして罵ってやりたい気もする。
しかしそんなこと、つまりは曲がり間違えばユウコの自己否定につながるような発言は一切許されないほど、ユウコには正体の分からない責任がついて回っている。

生まれはこれ以上なく高貴なもの。父は先代の帝であり母はその皇后。その母も最有力貴族である左大臣家の娘で、鳴り物入りで入内して見事双子をもうけた。
双子の片割れであるユウコの兄は、先代唯一の男子で当然に東宮となり、現在は若くして帝の位についている。

ここまで聞けば、蝶よ花よと育てられた内親王の幸せな様子が思い浮かぶかもしれない。しかし現実がそれに一致しないのは、足音荒々しく回廊を歩く様子を見れば一目瞭然だ。
ユウコの館は内裏に隣接して建っている。結婚したときに形式上別の家を持ったが、内裏の中にある神域へは壁が抜ける仕組みになっているので人目に触れることなく行き来することが出来、殆ど自分の家のような感覚だ。
「姫様、帝がお呼びですが……」
「後で参りますとお伝えして。とりあえず身体を清めます」
「ですがお急ぎであるとの仰せで」
「くどい！」
そう言って今まで本当に急ぎの用事であった例はない。それがユウコをより疲れさせた。本来なら何をおいても最優先すべき兄でもあ

る帝の命に服することが出来ない。それではいけないと知りつつも、理想のようには動けない。
それはこの国で最高権力者であるはずの帝の権威が揺らぎ始めていることの証明でもある。それを食い止めようするには、直接帝に会うよりもそれを取り巻く人々との絆を強めていくほかない。

女性がこの国で政治に関わることは異例だ。しかしそれだけならばまだユウコの立場は簡単だった。多少の無理をすれば、皇位継承権第一位にある者として周囲にそれを認めさせることが出来ただろう。だがユウコには皇族の女性として、斎宮の地位も与えられていた。斎宮の勤めは心底性に合わない。それだけならまだしも、付随する行為は心身を疲弊させる。目に見えない、触れることさえ叶わない相手に、一体何を願えと言うのだろうか。そんなことよりも目の前の状況をどうにかするほうが余程有益ではないのだろうか。
年頃の娘らしい楽しみや無責任な若さを放棄したことに後悔はない。それらにしがみつく事だって出来た。自分に命令を下すことの出来る人間など一握り、片手の指さえ余るほどしかいないのだから、「小雀」と嘲る類の人間にだってなれたに違いない。
しかしそれをしなかった。きっと何度時を遡っても、同じ選択をするだろう。

遥かに過酷な運命を背負って、海を渡った妹。絶望の色を瞳に浮かべそれでも最後に微笑んでみせた、最愛の妹。
妹(ショウコ)に顔向けできないような行いだけはすまい。
それだけが己を支える誓い。

重々しい音と共に、ゆっくりと扉が開かれる。
神域として区切られた空間だがさして他と大きな違いがあるわけではなく、強いていうなら斎宮と帝以外の立ち入りが禁止されている

ことだろうか。
本来ならば斎宮は都を離れて山中の神殿で祈りを捧げるべき存在だ。
そしてそれは未婚の皇女が勤める。
それをユウコが結婚しているという理由で内裏に仮の神殿を設けているのは、本末転倒も甚だしい。

それでもユウコはこの空間が嫌いではなかった。
誰の目に触れることもなく過ごせる場所は、もうここしか残っていなかった。

斎宮の勤めを終えて自室に着くなり打掛を荒々しく女官に放り、髪飾りを乱暴に外す。
「今日はもう休みます。下がっていいわ」
「はぁ、姫様。ですが…」
「……何か？」
部屋つきの女官が何か答えようとしたと同時に、部屋の奥から声が響いた。
「随分とご機嫌斜めだね？」
「貴方、まだいたの？主のいない部屋に居座るとは、どういう了見ですか」
そこの女官もさっさと追い出せばいいものを、己の職分を分かっているのか。
「ああ、彼女は悪くないよ。僕が君を待ってると言ったんだからね」
ユウコが斎宮の勤めに出てから、既に3時間が経過している。

「ずっと待っていたのですか？いいご身分ですね、余暇があるというのは」
「どうやら本当にご機嫌斜めだね。あぁ、君たちは下がっていいよ。このお姫様の相手は僕がするから」
その言葉に女官たちはあからさまにほっとした表情で退室していった。
「…主を誰と心得て……」
「理不尽に怒るのは良くないね。何があったの？」
御簾の内からの手招きに応じたわけではない。くつろぐにはそこに行かねばならないだけだ。何に言い訳をしているのか自分でも分からないまま、ユウコは御簾をくぐった。
「…何もない。斎宮の勤めは楽ではないだけです」
腰を下ろしながらそう答えるので精一杯だ。これ以上何と表現すればよいのか、ユウコにはわからない。
「それだけじゃないでしょう？顔を見れば分かるのに、どうして嘘をつくのかな」
言いながら腰を引き寄せられても、もはや抵抗する気力も体力もない。それに誰かに支えてもらうのは、身体だけでも楽だから。
「やけに素直だね。いつもそうなら嬉しいのに」
「馬鹿者が…」
「あぁ、やっぱりそのほうがユウコらしいか」

くすくすと笑いながら身体をなぞる手が目的を持って動いていることに気付いて、流石にユウコは抵抗した。
「おい、今日は…本当に疲れていて。やめて……！」
「見れば分かるよ。もう少し疲れたら、ぐっすり眠れるんじゃない

？」
弱弱しい抵抗を気にすることもなく、どんどん衣装を緩めていく。
「ふざけるのも大概になさって、やめっ…んっ！」
むき出しの肩に口づけられ、声が跳ねる。
それでもなんとか抜け出そうと足掻く両手を片手で押さえつけ、ユウコを縫いとめた男は妖艶に微笑む。
「ねぇユウコ。元気な君が好きだけど」
首筋から順に口づけを落としながら、片手は快感を流し込もうと動き続ける。
「…い、やぁ！……あぁ」
「今日はもう、諦めて…」
言葉は強引で行為自体には容赦ないのに、琥珀の瞳はどこか優しい。だからユウコはたまに錯覚しそうになる。そんなことはないと知りながら。
どう考えてもいがみ合う関係でしかないはずなのに、もしかしたらどこかに他の感情があるのではないかと探ってしまう。
腹部を彷徨っていた手が胸元に触れると、ユウコの身体が弓なりに跳ねた。緩やかに動く手は、それでも確実に快感を生じさせる。
「…はぁ、いや…ぁあ！」
「相変わらず感じやすい身体だね。素直に身体に従えばいいのに…」
もはや抵抗なんて出来ない、それがわかると拘束が外され更なる快感が送り込まれる。
「いやなの…に……」
すらりとした脚を這い回る手を、拒むことが出来ない。それどころか更なる快楽を望む自分は、なんて浅ましいのか。
脚を愛撫していた手が、目的の場所にたどり着くともはや何かを考えることなんて出来ない。ただ、波に飲み込まれるだけ。
「あぁぁ！…や、ぁぁん！」
故意にたてられる水音が、更なる羞恥と快楽を運んでくる。
「ユウコ」

虚ろな瞳が宙を彷徨い、男の顔で焦点を結ぶ。
「ユウコ。…絶頂を、見ておいで」
「あぁぁぁ…！……っ！」
もやがかかった頭がその言葉を理解するより早く、容赦なく身体を攻め立てられてユウコはそのまま意識を飛ばした。

だからユウコは知らない。そのときの男の表情を。
純潔が求められる斎宮でありながら、夫を持つ身。
矛盾をはらんだ女を抱きしめる、男の瞳を。

憎かりしかど　2（後書き）

ご感想などいただけると励みになります。よろしければ一言お願いいたします。

気を失って力の抜けた身体を、ゆっくりと褥の上に横たえる。
温かさが離れるのを嫌がるように、小さな子どもがむずかるように、ユウコがさぐるように手を伸ばす。
その伸ばされた手に手を重ねて、寝顔を眺める。

常日頃は厳しい言葉と頑なな態度で自分を拒絶するユウコが、甘えるようなそぶりをするのは本当に珍しい。それが見たいがために例え自分の肉体的な満足は得られなくとも、こうしてユウコと過ごすのがやめられない。
この国に来て、妻となる女性が斎宮であることを知らされた。そしてそれが純潔の身を求められる存在であることも。
繋がることなどないのに繰り返される行為を彼女が不審に思っていることも、また不快に思っていることも分かっている。一度は私を侮辱する目的かと糾弾された。
しかしこうでもしなければ、斎宮として自分には到底理解できない神という存在に仕えるユウコはどこか遠くに行ってしまいそうで。
勿論、ユウコにはそれ以外にも課せられた責任がある。この華奢な背中には不似合いなほど、重い荷物を背負わされている。その責任を放棄できるほど、幸か不幸か彼女は無責任ではない。おそらくは自分の彼女にとっては厄介な荷物のひとつに過ぎないのだろう。
心が痛まないと言えば嘘だ。でもそのことでユウコがそばにいてくれることに、暗い喜びを感じている。その心を幾許かでも占めることが出来るのだと思えば、それだけで。
「ユウコ……」
当然眠る彼女から返答はない。
しかしいつかその甘い声で、自分の名を呼んでくれるのではないか。
決してそうはならない現実を知りながら、虚しい期待を捨てられな

い女々しい自分に苦笑した。

ふわりとした黒髪を指に絡める。
ユウコはこの国の人の多くがそうであるように直毛でないことを嘆いているが、そんな必要はどこにもない。女性にしては長身の彼女が動くたびに、一呼吸遅れてゆれる黒がとても美しくて、何度も目を奪われた。
そもそもユウコの美しさは見た目よりもその内面にある。そうでなければ一人の人間にここまで心奪われたりはしない。始めは拒絶しようとして、それでも惹き付けられていつしか目が離せなくなった。

閉じられた瞼に唇を落とす。
ユウコにとって荷物でしかない自分がどんなに褒め称えたとしても、心の琴線には触れないだろうけれど。
「……重症だな」
無防備に横たわる白い身体を見ていると、１０年前の安易な言葉を歯噛みするほど後悔する。どうして幼かったとはいえ、安易な約束をしてしまったのだろうか。

これ以上は精神衛生上よろしくない。
頼りない理性をかき集めていつものように乱れた衣服を整え、彼女の部屋を後にした。

石畳の整備された大通りを蹄の音に気を使いながら、しかしそれな

りの速度で駆け抜ける。幸い今夜は月が明るいので、目を凝らす必要もない。帝が暮らす城へとまっすぐに続くこの道の両脇には、名だたる貴族たちが屋敷を構えている。
目的の場所にたどり着くと、愛馬の首を軽く叩いて労を労った。
この国に着て驚いたことの一つが、この馬だった。リュミシャールでは王族言えども良馬を手に入れるには、遊牧民から大金と引き換えに買うしかなかった。しかしオースキュリテでは比較的都の近くに馬を育てている村がある。そこではより強い馬、より速い馬を作るために研究も行われているらしい。

にもかかわらず、この国の貴族は馬に乗らない。
移動手段といえば、のろのろと動く牛車が主流だ。歩いたほうがよっぽど早いんじゃないかと何度も口に出しかけた。その上、牛車で移動するには必ず従者が必要だ。いくら帝からある程度以上の自由を許されているとは、決して褒められた生活をしているわけではない身にとっては面倒なことこの上ない。
そんなことを考えながら、気配を殺して屋敷に忍び込み目的の部屋の前にたどり着く。
本当はこんなことはしなくてもいい。この家の娘は先代帝から自由にしてよいと与えられた女だ。
しかし結局は仮初だとしても、無碍にするわけにはいかない事情がある。
「ご機嫌いかがですか？姫」
扉の奥から反応はない。しかし聞こえていないはずはない。
「月があまりに見事ですから、どうしても姫と眺めたくなりまして突然お邪魔してしまいました」
「……月を楽しむお相手は、私以外にもいらっしゃるはずですわ」
衣擦れの音とともに、拗ねるような嘆くようなか細い声が聞こえてきた。
「おかしなことをおっしゃいますね。月をともに愛でたいと思う相

手は、一人だけですよ」
祖国と同じ月を見て、それが幸せだと思える相手はきっとユウコだけ。
「……あまりに長い間、お姿を拝見できなくて。私は貴方のお顔を忘れてしまいましたわ」
「ですがこの声は覚えていてくださった。私たちにはそれで十分では？」
かちりと留め金が外れる音がする。
細く扉が開けられた。
媚びるように微笑む女の顔を月光が照らし出す。
その顔に手を伸ばす男の顔は、逆光で見ることは叶わないだろう。
仮にその顔が何の表情もうつしていないとしても、それを確かめる術はない。
あるいはそれは幸せなことかもしれない。愛されているという幻想を抱えていられるのであれば。

「あぁん、殿下、…殿下」
自分の下であえぐ女を、何の感慨もなく見下ろす。
これがユウコだったら。
そう何度も考えて、叶うはずのない現実に打ちのめされる。
「んっ…、あ、やあぁ」
この国に着いてすぐに、自分の妻となる姫は神に仕える人間だと聞かされた。その姫は純潔を求められる身であるから、男を受け入れることは叶わぬと。

その代わりに自由に出来る女を数人用意すると言われ、否はなかった。
気位ばかり高い姫よりは、割り切って楽しめる女のほうがよい。そう思った。
「殿下ぁ、もっと、……もっと私に下さいませ」
伸ばされ絡み付こうとする腕をつかみ、女の頭上で縫いとめる。
ユウコ以外の手は不快でしかない。
しかしこうして欲求を発散しなければ、いつか暴走してしまいそうで。
本当は神に逆らってでも、ユウコが欲しい。あの純潔を汚してしまいたい。
「……っ！」
思考を振り払うように、女を乱暴に突き上げる。
いやいやと目に涙を浮かべて首を振る女が、何度目かの絶頂を迎えたことを感じて、女の腹に欲望を放った。

身体の満足は得られても、心は渇ききったまま。
砂漠の砂が水を吸い込むようにユウコを求め続ける心は、きっといつまでも満たされない。

憂き我を

朝起きたら状況が劇的に変化していた。

そんなことは絶対にない。

いっそ政変が起きれば、いっそ神が否定されれば。十代のころはいろいろとくだらないことも考えた。今でも考えないと言えば嘘になる。祖国の後ろ盾を活用すれば、出来ないことはない。しかしそれはユウコが必死で守っているものも同時に破壊することになる。それがユウコを解放することに繋がったとしても、彼女は破壊者である自分を許さないだろうし勿論傍にもいないだろう。

結局は自分には何も出来ない。

つかず離れず。

自分から彼女に近づくことも出来ないが、彼女が離れることも許さない。そんな卑怯な距離を保って日々をやり過ごすことに、最近ようやく慣れてきた。

「殿下…、お目覚めですか？」

お早いですね、と眼をこすりながら起き出した女に、顔の筋肉だけで笑ってみせる。

昨晩は身体だけを貪った相手だが、この女に罪があるわけではない。

「おはようございます、姫。お体は辛くはありませんか？」

こんな言葉に頬を染める女を可愛いと思う。

だがそれだけだ。

心が振れない。

それならば何の意味もない。

すっかり身支度を整えた姿に、女が訝しげに声をかける。
「殿下、朝餉の仕度をさせますわ…。もう少しここにいらして」
つと衣のすそを引く手をやんわりと外し、辞退する。
「…では、次はいつ来ていただけますか？」
女の身でそのようなことを訪ねるのは屈辱であろう。その顔が先程とは違った理由で赤く染まっている。先代帝にあてがわれた女とはいえ、この女の父親も娘と自分の関係から出世の糸口を探っている。
それゆえ、軽はずみなことは口には出来ない。
「お約束はいたしません」
「そんな…後生ですから……」
「…私を思って日々を数える、そんな姫が見たいのですよ」
女の耳朶に息を吹きかけるようにして言葉を残し、屋敷を後にした。

所詮は人質の皇子とはいえ、それなりに義務もある。
その一つが、顔見世もかねた参内だ。自分はあなた方の管理下にいますよと告げるためだけに、宮中に顔を出す。もちろんそこでは誰も自分に政治的な意見など求めていないし、こちらとしてもまじめに議論に加わる気もない。ただ時間が過ぎてゆくのを緩慢に見守るためだけのものだ。
参内するときでさえ、この国の男は結い上げなければならない髪も緩くまとめておくだけで誰にも咎められることはない。
存在は必要だが、それは見えなくとも問題ない。

空気のようだな、と自嘲気味に笑うのが常だった。
騎馬のままで門をくぐり、さすがにここまでかと思う場所で馬を預ける。これも決まりきったことだ。
本来ならば宮中に馬で乗り入れるなど許されないが、帝以外に自分に正面から注意を出来る者などいない。その帝は宮の奥深くから出てこないのだ。怖れるものはない。
せいぜい物言いたげな視線が投げかけられる程度。
自分が正しいと思うのであればそう主張すればいい。まさかいきなり切って捨てられるとでも思っているのか。
「相変わらず、好き放題だね。天帝の君」
「その呼ばれ方は好みじゃない。何度言えば理解する、この鳥頭。貴様の頭は飾りか髪の台座かいっそ頭を丸めればそれも不要だろう軽くなっていいんじゃないか？」
「よくもまぁ、そうぽんぽんと言葉が出てくるね。男は黙して語らずだよ」
鳥頭とか頭を丸めるとかそういう語彙はどこで獲得したのかな、と笑う男は傷ついた様子もなく歩を並べて歩き出す。
軽薄なことこの上ない男を睨みつけるが、それで怯むような相手ではない。
「うるさい。朝から貴様の顔を見るとは今日は厄日だな」
「僕にとっては吉日だね。妹から君に言伝を頼まれている。もう5日も前だけどね。
　妹が僕を責めるんだよ、なんで伝えないのかって。でも君に恋している妹の理想を崩すわけにはいかないだろう？まさかお前の惚れた相手は見てくれだけの男で滅多に参内さえしないなんて、僕は妹には言えなくてね」
辛いところだよ、と嘆く振りをしてみせる相手を無視する形で歩を進める。
しかしそんなことが許されるはずもなく。

「今日、時間空けとけよ！」
容赦なく後ろからかけられた声に、軽く手を振って了承の意を伝えた。
右大臣家の次男坊であるあの男。母親が神事を司る家の出であることから榊の君と呼ばれる男は、１０年で得た唯一の友人らしきものと言ってよかった。

いつものように座って欠伸をかみ殺すだけの会議からやっと解放され、これ以上面倒なことに捕まる前にとそそくさと歩き出したところを、榊にあっさりと捕まった。
「逃げる気だったかな？僕としては読み通りだけどね」
「……。ああ、忘れていたな」
悪びれもなく言い放つ様子にがっくりと肩を落として呟かれた。
明らかに聞かせる目的で。
「……鳥頭は君じゃないか」

榊の家に場所を移し、二人は酒を飲み交わす。
この国は夜が白み始める頃に、一日の政務に取り掛かる。そして午後は殆ど仕事らしい仕事はしない。来たばかりの頃は何と馬鹿らしい習慣かと眉をひそめ密かに抵抗も試みたが、それなりに世間を知るようになる頃にはその理由も分かってきた。同時にユウコの絶対零度の視線がかなり痛かったというのも、今では認めることが出来るこの習慣を受け入れた理由である。
オースキュリテでは帝の前で政策が決まることは殆どない。勿論形式的には帝の決定を仰ぐことにはなっているが、それは判を押すことが求められているだけだ。
具体的な内容は発達した貴族社会のなかで、いくつかの家が特権的に行っている。
「発達した、というよりは発達しすぎたんだ」
「いいのか、そんなことを口にして」
「構わないさ」
大抵の連中は同じ事を考えている、と言いながら榊は杯を空けた。
「初めの頃はなかなかいい制度だと思ったけどな」
「そりゃね、効率はいいさ。リュミシャールでは皇帝と同等の議会があるんだろう？それなら決定までに時間がかかるのも仕方ない」
でもね、と言い置いて榊は杯に酒を手酌で注ぐ。
「確かに父から子へ仕事が受け継がれれば、断絶がない。技術的知識・情報も持っている。でも行き着く先は専制と腐敗だ。誰もが甘い蜜を求めて腐る」
「だが悪いばかりでもないさ。日のあるうちに飲む酒も乙だ」
そう言って杯を掲げると、榊はあっちにいた頃には飲んだこともないくせにと笑った。
「なぁ天帝。国の話、聞かせて」
またか、と思いながらもそれは口にはしない。この国の腐敗の中

で抗う男が求めるのなら、何度でも。
「その呼ばれ方は好きではない。それに天帝というなら兄上だ。髪の色は同じだが、瞳は赤と紅の色をしている。
　それこそお前たちが崇め奉る『天帝』だろう？」
人々に恵を与え、時には罰するために天災をも用いる。荒ぶる神でありながら豊饒の神。
「あってみたいよ、君の兄さん。ってもリュミシャールの皇帝陛下か」
でもさ、と顔だけでこちらを向いて榊は言う。
これもいつものことだ。
「僕は好きだよ。君の琥珀色の瞳。時間や場所によってあるいは抱える感情によって見え方変わるよな。
　もう少し時間がたって夕日になれば、茜色に見える」
そんな言葉をかけられるようになったのは、一体いつからだったろう。

憂き我を（後書き）

よくしゃべる男の登場です。遠慮のない会話は書いていて楽しいですね。

コメント・ご感想などいただけると嬉しいです。よろしければ一言お願いします。

あ、あと。この雪待ちの花と対になっている物語の「砂漠の蝶」（これも小説家になろうサイト様で出しています）はもうちょっと話が進んでいるので、よろしければ覗いてやってください。

とりどりなれば（前書き）

近親相姦の要素が含まれます。倫理道徳上、架空の物語上でも認められないという方はこの先は読まないほうがよいかと思います。

とりどりなれば

昨日榊と飲んだ量が多かったのか、ずきずきと痛む頭を抱えて低く唸る。
結局榊の妹には会わずにすんだ。それが良かったのか悪かったのか、この頭痛を考えると微妙なところだ。
夢見が悪かったと参内を断って、午前中一杯は家で誰にも会わずに過ごした。
この国では事の外占いや神のお告げといったものが尊ばれる。はじめはいちいち何の根拠も無いと反発していたが、慣れてしまえばこんなに楽な言い訳は無い。

そんなことを考えながら、いつしかまどろんでいたらしい。控えめにかけられた声にゆっくりと瞼を持ち上げた。
「…どうした？」
「お休みのところ申し訳ありません、殿下。リュミシャールよりお手紙が」
「入れ」
失礼しますと言って引き戸を開け、侍従が御簾の内に手紙を滑り込ませた。
ざっと斜め読みして内容を確認する。毎度のことではあるが、内容に大きな変化は無い。始めの頃は国恋しさもあってたまには返事を出していたが、最近ではそれも無い。
もはや国の空も覚えていない。どんなに言葉を取り繕ったところで、自分はもしものときの捨て駒として扱われたことに変わりは無いのだから、こちらに忠誠を求められても応える義理は無いと考えるようになっていった。
「帝やお歴々は内容を確認しているな？」
それは聞くまでも無いことではあった。毎度の事ながら封蝋が壊さ

れている。ここまであからさまにやられれば、いっそ信書の秘密なんてものもどうでもいいような気がしてくる。
――――こんなに分かりやすく、国家機密が送られてくるはずが無いものを。
「ならばこのまま処分しろ。下手に保存しておいて不必要な疑いをもたれるのもつまらないからな」
言い含めるように聞かせると、従者はそのまま手紙を持って下がっていった。おそらくこれから手紙の中に暗号や何かを示すような記号が書かれていないか、頭を寄せ合って探すのだろう。
ご苦労なことだ。そんなものはあるはずが無い。
政治から切り離されて皇族らしい教育を殆ど受けずに育った自分に、リュミシャールが国家機密など漏らすはずも無い。
しかしそれを口にすれば、こちらでの立場が悪くなるだけだ。利用価値が無いと知られれば切り捨てられる。ユウコからもっと遠くへ追いやられる。
嘘をついた覚えは無い。真実を口にしないだけだ。
「……詭弁だな…」

しかし。

何が悪い？

何が悪かったのだろうか。

何をどこで間違ったのだろうか。

答えなんて出るはずが無い。常にその時々で最良の選択してきた結果が現在だ。仮に現在から振り返って過去の選択が間違っているとしても、それは結果論でしかない。
結果論が語れるのは現在があるからだ。
もしあのとき別の選択をしていたら。当然現在は変化する。つまり結果論を語る今この時この状況は存在しない。
だから人生は結果論で語ることなど出来ないのだ。
「ユウコです。ただ今まかりこしました」

御簾の内、紫煙たなびくその先で人影が揺れる。

「お体の具合はいかがでしょうか？本日は閣議もご欠席と伺いましたが、それほどまでにお体が優れないのなら私はお暇いたしましょうか」
ユウコが吐き出す毒に、周囲は顔を青ざめる。しかしユウコを呼び出した御簾の内の人物はあからさまな嫌味にも全く反応を示さない。いつものことだ。
口で何を言ってもユウコが自分に抗いきれないことを知っている。そう思っていること自体、優しさの現われだ。いつでも自分を加害者と考える人は、きっと優しい人なのだ。
鼻を突く匂いが部屋中に充満し、それが益々ユウコの苛立ちを助長する。
――――私は優しくはない。むしろ貴方にとても残酷なだけなのに。
「下がりなさい」
「はっ！しかし……」
「下がれ！これは斎宮の命令です」
斎宮の名にはじかれるように部屋を出て行った者たちの足音が遠ざかるのを確認し、ユウコは御簾の内へ踏み込んだ。
「怒っているのか？」

紫煙を燻らせ、僅かにかすれた低い声が問いかける。
「私が何を思おうと考えようと、それを慮ってくださったことがありますか？」
「……無いな」
くつくつと喉の奥を震わせ、ゆっくりとユウコを手招く。
「近う、ユウコ。……我が妹よ」

その言葉に抗うことは出来ない。
それはこの大国を統べる唯一の人、帝の言葉なのだから。

「政をおろそかになさらないでください。帝は兄上なのですから」
「それは斎宮としての言葉か？」
ユウコの頬を撫でながら、揶揄するような笑いを含んだ声が届く。
「……私には斎宮たる資格はありません。それは兄上が一番良くご存知でしょう？
よしんばあったとしても、斎宮とて帝の臣下です。ですから私は兄上にお願いするよりほかにありません」
「そうだな、ユウコ」
頤に手をかけられ、強制的に視線を合わせられる。互いの吐息がかかる距離で自分と良く似た兄が笑う。
極めて残酷に。

「お前の純潔を奪ったのは、この私だ」

それはまるで所有の宣言。
返す無言は帰属の証か。

寄せられる唇を拒むことも無く、ユウコは自ら舌を絡めた。
神に捧げるべき純潔をなくした自分に、斎宮たる資格は無い。あの男の妻たる資格も。

それ以前に同母の兄と肉の関わりを持つ獣以下の浅ましさには、きっといつか天罰が下るのだろう。
濡れた唇をひどく優しい手つきでなぞられる。
瞼に、こめかみに、額に。次々と落とされる唇を甘受して。
「兄、上……」
吐息とともに呼びかければ、するりと衣服が滑り落ちていく。
「ユウコ…。お前は……」
露にされた胸元が、外気に触れて粟立った。それを慰めるように大きな手が身体を撫でる。
「私が憎いだろうな」
毎回繰り返される断定にも似た問いかけに答えることは出来ず、首を振ることも頷くこともしない代わりに肩口に顔を埋めた。
その間も愛撫の手は休むことなく、確実にユウコの身体に快感を流し込む。
もどかしい動きに耐え切れず、さらなる行為をねだるように体が動いた。
正気では兄弟で睦み合うことなど出来ない。後で吐き気を伴うような罪悪感に蝕まれようとどんなに厭世的な気分になろうとも、ただこの時ばかりは肉の欲求に従って獣のように。
「何故お前は私の呼びかけに応じるのだ。毎回、毎回。意に沿わぬ行為を強要されると分かっていて」
「兄、上…っ。ん…ぁん！」
兄の理屈はいつも優しい。
帝である兄に強要されて、そむくことが出来ない妹。そういう構図を与えてくれる。
「私は結局お前を見ているわけではない。…それを十分分かっていって……！」
敏感になった身体を刺激され、か細いけれど確かに色に溺れた嬌声が上がる。
濡れたそこを探り当てられもっとも敏感な蕾を刺激されれば、白い

背中が弓なりに反る。
身体を軋むほど強く抱きしめられた後に、初めて目が合えばそれが合図となる。快楽に白む頭の片隅で、しかし恐ろしく冷静に、ユウコはいつもタイミングを計るのだ。
兄が追い求める面影を思い起こして。それに近い表情を作って。
「タカ、オ……っ、あ、ふぅ…ん」
見開かれた兄の目は、もう自分を捉えていない。その遥か先、もはやこの世に存在しない人を求めている。
それが分かっているから自分の言葉を合図に激しく貫かれ身体が快楽を感じようとも、返す反応は緩慢なものになる。ここから先はユウコという個人は邪魔なものでしかない。

兄上。
私は自分の行動が、貴方の心を壊すと分かっています。

でもそれで貴方の目をあの子から逸らすことが出来るのなら。
それで貴方に多少なりとも満足していただけるのなら。
私は自分が被害者の顔でいられるこの状況が、一番楽で居心地がいいのです。
ただそれだけ。保身のために。

私は貴方を壊します。

わびごと

簡単に衣服を整えると、ユウコは何も言わずに部屋を辞した。
今のところ、互いに自分達が最低の行いをしていることは分かっている。獣にも劣る、人間として生きる価値の無い行為。
しかし兄の中で、罪の意識は確実に薄くなってきている。ユウコを引きとめようとする仕草、物言いたげな視線。
どうすることもできないまま、ただ事実だけを積み重ねて。
この国の過去の文献を遡れば、父を同じくする者同士が睦みあったという記録は残っている。血が近いもの同士の子は何らかの障害を持つ可能性が高くなるらしい。しかしその反面天つ才を持つものも生まれることがある。時の権力者はその可能性にかけていた。
つまり多くは捨て駒で、求められているのは低い確立で生まれるかもしれない者だけだ。
今は無い国だが、海の向こうの国では父と母を同じくする者同士が子を為すこともあったらしい。
しかしこの国においては、同じ腹から生まれた者達が睦みあうのは絶対の禁忌だ。
その禁忌を、国を治めるべき帝と信仰の中心である斎宮が犯している。自分でも吐き気を覚える行為を、どうして人が許すだろうか。

体内から粘液が流れ出る感覚に、眉をひそめる。ずるりと太腿を伝っていくのと同時に、自分の大切なものも流れ落ちていくようだ。
こんな生活は綱渡りだ。いくら手早く胤を流したとしても、子を作らないための薬を飲んだとしても、そんなものは確実ではない。
もしこの腹に子を宿したら。

迷う余地は無い。堕胎するしか道は無い。この父親の存在は知られてはならないし、純潔である斎宮が孕んだとなれば、それは神に対する冒涜だ。
ユウコは足早に人払いのしてある回廊を抜けると、車に乗って館へ戻った。

宮の最奥、御神体が置かれている場所に入るためには、毎回身を清めなければならない。
皮肉にもこれが最も人目につかずに、情事の後の身体を洗うことの出来る場所だ。普段ならば入浴は女官の世話にならなければ怪しまれるが、これは一種の神事であるため人目もなければ手伝いも無い。
宮の中庭には、山から引いている沢がある。ユウコはそこでいつも禊を行う。禊は形式的なものなので、本来は専用の浴室で身体を清めてから沢の水で手を洗うことで十分だ。しかしこの冷たすぎる水を浴びることで、最後の一線が保たれるような気がしている。
冷たい水が身体を伝っていく。
反射的に縮こまりそうになる背中を意識して伸ばすと、するすると伝うべき場所を通って水が流れていく。
濡れて張り付く浴衣ごしに冷え切った肌をさすると、細い月がユウコを嘲るように笑っていた。

「……ショウコ」
同じ月を見ているだろうか。
最愛の妹は、今も元気でいるのだろうか。幸せを見つけられたのだろうか。

何通も何通も書き続けた手紙に返信は無い。
やはり許されないことをしたのだ、と後悔しても断罪してくれる人はいない。
それでも。たとえ罵られるだけだとしても。
「ショウコ…声を聞かせて……」
震える身体を抱きしめた。
顔の前に広がる白い息が散り散りになり消えてゆく。その後を追うようにまた不安定な塊が生じては消えてゆく。
呟きは誰の耳に届くことも無く、ただ闇夜に浮かぶ月だけがその声を風に乗せた。

例え身体を清めるための方便とはいえ、一度宮に入った以上斎宮としての勤めを怠るつもりは毛頭ない。斎宮の白装束に身を包み、祭壇の前に座れば不思議と気分が落ち着いてくる。ひんやりとした祭壇の間の空気は背筋を伸ばし気を引き締めるのにちょうどいい。
祭壇に飾る榊の枝を取替え、杯に水を満たす。榊の葉の艶のある緑が、冷たく透明な水を弾いて木目に一つ染みを作った。
豊饒なる大地を敬い、天界を統べる天帝を崇め奉るのが斎宮の仕事だ。祈りや儀式にどれほどの力があるのかはユウコの知ったところではない。しかしそれらを懸命にこなすことが一種の贖罪と感じるからそれをするまでのことだ。

優しい雨は天帝の恵。
厳しい雨は天帝の怒り。

凍った雪が降る頃は、天帝が我らに与えた休息の時。

大いなる力の前に、人間が出来ることなど何も無い。
だからこそ人は祈るのだ。
時として荒ぶる神が、どうか穏やかに人の世を見守ってくれるよう。

豊かな自然を持つこの国は、その恩恵に与る一方で常にその脅威に晒されてきた。
それぞれの地域がそれぞれに小さな王を有していた時代から、神の意思を実現するのが男であり、神を慰するのは女。これもまた変わることなく今に至る習俗だ。
一人の帝を戴く現在、神からその意思を聞くのは帝であり神に人の思いを伝えるのは斎宮となった。

斎宮が行うべきとされることは、現在においては非常に儀礼化している。
もはや考えるまでもなく、幼い頃に体が覚えたことを無心に行う。
それでいいはずなのに。
次にすべきことは何であったか。常ならば決して抱くはずの無い疑問を持ったとき、ユウコはようやく体の異変に気が付いた。
頭が締め付けられるようにずきずきと痛みを訴える。異様な寒さはきっと自分の体温が上がっているせい。榊の水をこぼしたのは、手が震えていたから？
このままではよくない事態を引き起こす。
そう思って急に立ち上がったのが決定的に良くなかった。
激しいめまいに耐え切れずひざが崩れ、派手な音を立てて体が床に沈みこんだ。床の木目が眼前に迫るが、それが酷く歪んで見える。
「斎宮様、いかがなされました？！」
「斎宮様、ここをお開け下さいませ！」
「斎宮様！」

巫女たちが外で騒ぐ気配をぼんやりと感じ取った。音に気付いてくれたことには感謝したいが、重い扉を開けられるような状況ではない。一度自覚してしまえば体がぶるぶると震えていうことを聞かなくなってしまった。
しかし祭壇の間は中から開けられない限り、例え巫女いえども開けることは出来ない。その扉を開け中に入ることが許されるのは斎宮と帝、ただ二人のみ。
このままではいけない。
せめて扉を開けなければ。
頭がそう警鐘を鳴らすのを聞きながら、ユウコの意識は闇に落ちた。

ざわざわと、遠くに人の気配がする。そばに行きたいような、このままここに留まっていたいような、そんなどこか物悲しい気持ちになったのはいつ以来だろうか。
たとえば旅先で、その土地の人が生活する匂いを感じ取ったとき。
そんなときは自分が輪の外の人間だと痛感する。
強く襲い掛かる、郷愁の想い。
だめ、囚われる。
恐怖に目を閉じるが、額にそっと触れた温かさに抗いきれず恐る恐る瞼を持ち上げる。
霞む視界がぼんやりと像を結ぶと、それはよく知った人だ。
「…兄、…上…」
「目が覚めたか？気分はどうだ？」
その声とともに、額にあった温かさが頬へと移動する。それがあまりに心地よくて、ユウコはほっと息を吐いた。

「わたし、は……」
祭壇の間で倒れたことは間違いない。しかしその後の記憶は全く無く、いまだに痛む頭を探るが思い当たるものは無かった。
起き上がろうとしたユウコを制して、タカオは薬湯が入った器を優しく口に押し付ける。ユウコがその独特の匂いに顔をしかめると、相変わらずだなと呆れたように言いながらも有無を言わさずユウコの口に薬湯を流し込んだ。
「ユウコ、無理はするな。確かに斎宮の仕事は大切だが、お前が祭壇の間で倒れているのを見たときは寿命が縮まる思いだった」
苦悩に眉を顰めてかけられた言葉があまりに優しくて、弱った心には甘い毒だ。
「ごめんなさい、ご心配をおかけして…。兄、上……」
高い熱にかすれた声は、自分のものとは思えないほど弱弱しい。
「心配させろ。お前は昔から自分のことに無頓着すぎる。しばらくの間お前の仕事はゆっくり休むことだ。いいな？
……神事はしばらく私が代わる。とにかくここで身体を休めてくれ」
その言葉を夢うつつで聞きながら、ユウコの意識は再びゆっくりと沈んでいった。

わびごと（後書き）

よろしければ、コメント・ご感想などよろしくお願いします。

読んでくださった方に、最大級の感謝を。

わびごと　2

帝付きの侍医たちが尽力しほぼ常時看護を受けたにも関わらず、ユウコの体調はなかなか回復しなかった。目が覚めたと思ったらまたすぐに眠りにつくような状態が数日続き、最初に目覚めたときに帝と会話をした以外はまともな意思の疎通も図れない。
国家の精神的な基盤である斎宮が倒れたことが知れれば、大事にならざるを得ない。よってその事実は極一部の人々にのみ知らされる運びとなった。

しかし内裏の中でも帝の私的な空間に近い場所に絶えず侍医が詰めていれば、どんなに注意を払ったとしても貴人が体調を崩したのだという噂が立つのは避けられない。
ユウコの屋敷には、しばらくの間内裏で神事を行うこととなったため帰れない旨伝えてある。
基本的に内親王は屋敷で人目を避けるようにして暮らす。よってそもそも不在に気付く者も少ないので、外にユウコが体調を崩したことが漏れる心配は無い。

しかし内裏の中では、帝が気遣う貴人が誰であるのか、噂話に花が咲いていた。

「女たちは皆噂しておりますのよ？…主上が新しい方を召されると。しかも主上直々にお部屋に詰めていらっしゃるなんて、いかほど深いご寵愛でしょう」
「……お前もか、キョウコ。その話は飽き飽きしている」
「……否定はなさりませんのね。どちらの姫君が入内されるのですか？」

「詮索好きな女は好かん」
冷たく切り捨てられた女はそれでも儚げに笑ってみせた。それはキョウコが女御として入内し二人が初めて顔を合わせた時から、全く変わっていない。父の期待を背負って入内した幼い日、内裏の中で生き抜くのはこの人に縋るしかないのだとキョウコは悟った。
悲しいほど的確な処世術だった。
だからこそ際立って家格が高くなくても女御として選ばれたのだろう。若く気難しいと評判の帝の傍に侍る女には、余計な主張など不要。ただおとなしく歯向かうことなく、世継ぎをあげられればそれでよい。
しかし今上帝には数人の女が入内しているが、誰一人として未だに子を生せずにいる。
今国には皇位継承権者が極端に少ない。帝に子はなく、妹であるユウコは斎宮。
そしてもう一人はリュミシャール皇帝に嫁い異母妹のショウコ。
この状況が国にとって不安定であることは間違いない。誰もが危機感を抱いている。
「申し訳ございません。他の女たちにもあまり騒がぬように言っておきます」
至高の存在である帝に欠けたものがあるはずが無い。ましてや胤が無いなど。
悪いのは入内した女たちだということになる。内外からかかる重圧は相当なものだ。
子がなければ後宮の女たちには帝のほかに頼るものが無い。入内した以上頼るべきは生家ではなく、己が才覚と帝の寵愛となるのだから。
しかしキョウコの返答に興味がない様子で、タカオはつと視線を庭に走らせた。
「寒椿がもうじき咲くな」
庭でひっそりと咲く準備を始めた花が、冬が近づいていることを知

らせている。
「毎年、庭師が丹精込めて手入れをしているものですから、今年も楽しみですわ。冬の間はあの花がないと庭がどうしても寂しいですから」
「……似ているな…」
「主上？」
あの花はユウコに似ている。
他の花が穏やかな季節の中で守られるようにして咲き誇るのに対して、椿は一人厳しい冬を待って咲く。
まるで雪の訪れを待つように。
そして春がやってくれば、未練など感じさせずに躊躇いもなく地面に落ちる。

その苛烈さが。
潔さが。
愚かなまでの矜持の高さが。

「切らせろ」
「は？」
「この庭に椿は不要だ」
「ですが…」
「くどい！」
落としてなるものか。
アレが望むものが、自分でないとしても。
地に堕ちて朽ちていく様を見るくらいならば、いっそ咲く前に手折ればいいだけのこと。

「主上……」
呼びかける言葉に、応えはなく。
歪めた表情を隠すこともなく歩き去っていく。

気難しくはあっても感情の起伏は少なく、強いて言うならば常に不機嫌を保っているのだと思っていた。
突然の変化にかける言葉もなく、女御は去っていく背中を見送った。
「どなたに、似ているとおっしゃるのですか……」
どれほど長く連れ添っても、貴方は私など目に入らないのでしょう。
貴方のお心を占めているのは、未だにただあの方お一人なのですか？
「……っ！」
手もつけられずに冷え切った茶を、高価な茶碗ごと庭の隅に投げつけた。
しかし非力な腕から投げられた茶碗は、椿には届かず茶色く冷たい地面に落ちて砕け散る。
「女御様？！キョウコ様、いかがなされました？」
物音を聞きつけた侍女が声をかけてくるが、今の自分はたとえ気心の知れた者といえども見られたくはなかった。
「大事無い！構わないで」
「ですが…」
「……お願いだから、下がってください！」
主の悲痛な叫び声を聞いて、しばらくの躊躇の後衣擦れの音が遠くなった。
気配が完全に無くなってから、堪えていた涙が零れ落ちた。
この涙を以ってしても、この温かさを以ってしても。私は骸（むくろ）にさえ敵わない。主上のお心はいつも遠く、現世（うつしよ）を捉えてはいらっしゃらない。

「様子はどうだ？」
突然現れた帝に礼をとろうとする侍医たちを制して、タカオはユウコの枕元に腰を下ろした。本来ならば帝が直に畳に座るなどありえ

ない。ましてや誰かの病床に侍るなど。
しかしこの数日である意味異様な帝の斎宮の扱いを見てきた侍医たちは、賢明にも口を閉ざし治療を続けた。
「斎宮様は、ほんの一時お目醒めになられてもすぐに眠ってしまわれまして」
「ふん。優雅なご身分だな。それで？原因は何だ」
口では皮肉を言っても、その表情は常からは想像も出来ないほどの慈愛に満ちている。それがど気付いていないし気付く気もないというように。
「もともとお体の弱い方ではございませんが、おそらくはお疲れが溜まっていたのだろうと思われます。それに加えてその…不敬に当たりますかもしれませんが……」
「構わん。なんだ？」
「神事の前の禊で、お体を冷やされたことが引き金になったものと考えます。これからはより寒さが厳しくなりますゆえ、お体第一とお考えならばお控えくださいますようお願いいたします」
「……この馬鹿が」
吐き捨てるように呟かれた言葉は、侍医に向けられたものではない。内々では神事の前の禊など省略が当たり前になっている。タカオとて即位の儀式以外では頭から冷水を被るなんて酔狂な真似はしたことがない。
だがユウコはそれを行っていた。長い髪が水気を含んで重くなるほど。
タカオが巫女たちに呼ばれて駆けつけたときには、髪から滴り落ちた水の中に倒れこむようにして意識を失っていた。
今は髪箱の中に納まっているふわふわとした黒い髪を梳いた。一見すれば指に絡まりそうなものを、実際には指の間から零れ落ちていく様は皮肉だろうか。
それほどの苦行か。お前にとって。
私といることはそれほどまでに辛いのか。実体のない存在にまで許

しを請いたくなるほどに。
「主上、斎宮様が時折呟かれるのですが私どもには何のことやら」
「……何と？」
「それが本当に分からないのです。全く聞きなれない音ですがおそらくは『レイシア』と」
――――神経が、焼き切れる音がした。
無意識に弄んでいた髪を握り締めれば、僅かにユウコの顔が髪を引かれた痛みに歪む。
「レイシア…だと？」
突如帝の眉間に刻まれた皺を見て、侍医たちは平伏して言葉を続けた。
「いえ、それが正しいのかはわかりません。聞きなれない音でしたので…。
　勿論私どもには主上の一言ですべてを忘れる準備があります」
どうやら皇族の秘密か何かとでも思っているらしい。そうであればこの者たちに一言忘れろと命じるだけで済んだものを。
ここまで不愉快な思いをさせるとは、どこまでも忌々しい。
――――砂漠の、皇子！――――

「会えない？」
能面のような顔をした侍女は、淡々と言葉を紡いだ。
「はい。ユウコ様におかれましては、斎宮様としてのお勤めでこちらにはいらっしゃいません」
「……随分、長いね？」
昼間に訪ねたときも、斎宮の勤めの最中であると言われた。彼女の

複雑な立場と地位を理解しているのでそれに異を唱える心算は無い。
しかし一日中宮にこもっているというのは到底信じがたい話だった。
加えて、ここ数日はユウコの屋敷を訪ねていなかった。だとすれば
今日だけでなくその前からこの不自然な状態が続いていた可能性が
ある。
「……神事に関しては、私には分かりかねます」
「確かにね。君のその立場もわかるよ」
周囲に他に人がいないことを確認して、すっと目を細めてレイシア
は言葉を紡ぐ。
「でも僕は彼女の夫だ。君はそのことを理解したうえでその態度な
のかな？
僕は君を害したくは無い。出来るなら君の意思で知っていることを
すべて話してもらいたいんだ」
侍女の顔に微かに怯えが走るのを確認して、少しばかり良心が痛ん
だ。しかしそんなことに構ってはいられない。
明確に何がおかしいと言えるわけではない。取り越し苦労になる可
能性のほうが高いことは分かっている。
しかし、ざわつく不安は消すことが出来ない。
「あ…、の。私には分からないんです。ただ内裏からしばらく戻ら
ないと手紙があったとしか」
「そう…」
「本当に、他には何も…」
「信じるよ。それで、その手紙はユウコの直筆だった？」
「私は遠目にしか…。でも、女性の筆ではなかった…ような」
それだけ聞けば十分だ。おそらく本当にこの女はこれ以上のことは
知らないのだろう。もとより、末端にまでずべての情報が伝わって
いるとは思っていないが。
「そう。ありがとう。分かっているとは思うけど、このことは…」
侍女の顎をきつめに掴んで視線を合わせれば、今度ははっきりと怯
えた表情になった。

「分かっています。口外は、しませんから」
その返答に満足して屋敷を後にした。
ユウコが大切なことの連絡を人任せにするとは思えない。だとすれば何かあったと考えるのが適当だろう。
ざわつく不安を押さえ込んで、馬首を返した。

わびごと　2（後書き）

天帝の君のお名前公開です。まぁ「砂漠の蝶」では早々に公開していたのですが。

ご感想・コメント大歓迎です。よろしければ一言お願いします。

わびごと　3

「君は…常識をどこに忘れてきたのかな」
「知るか、そんなもの。生憎最初から持ち合わせていないな」
「今からでも遅くないよ。ご母堂の体内に取りに行ってくればいい」
珍しくやさぐれた様子で、榊は杯を傾けた。山を借景にして人工的に作られた庭は今が秋の見ごろを迎えていて息を呑むほど美しいが、そんなものは急降下した機嫌を直す助けにはならない。
「普通、家に行って『外出中』って言われたら、諦めるでしょ。あー、君に行き先を教えた家の者にもがっかりだね」
「片がついたら謝ってやる。だから今は話を聞け」
頼む立場のくせにどこまでも不遜な物言いであるが、榊は今更そんなことに腹を立てなかった。女性との逢瀬を邪魔された後で、そんな些細なことはいちいち気にならない。
ここしばらく仕事以外の時間の殆どをつぎ込んで、歌を送り花を贈り噂を流しようやく手にした女性に「私よりも優先したい方がいらっしゃるならどうぞそちらに」と絶対零度の声音で言われた日には、それに勝る感情の振れなど滅多に無い。

「……あれは多分修復不可能だよなぁ。ようやく父上のお眼鏡にかなう女性だと思ったのに、また振り出しか。家に帰ったらまた愚痴を聞かされることになるね、なんて哀れなんだ私は」
「愚痴愚痴と面倒な男だな。結局お前があの女より僕を選んだからここにいるんだろうが。責任転嫁は見苦しいと思わないか？」
あんまりと言えばあんまりな理屈に、榊はもう何も言うまいと心に決めた。
父が認める家柄の女性は探せば他にもいるだろうが、結局この男は一人しかいない。選んだと言われれば確かに恋人よりも友人を選んだことになるのだろう。

「君は自分勝手も程ほどにしないと見苦しいと知るべきだと思うね、いつか。
……で、何の用だい？」
ため息混じりに吐き出した言葉は、降参の合図だ。
猫が笑うとしたらこんな表情だろう。
その顔を見た瞬間、榊は後悔で目眩がした。

『心配しないで。必ず私が守ってあげる』
――何も出来なかったくせに。嘘つき。
『本当…に？』
『勿論！だって私はショウコのお姉ちゃんだもの』
『…ユウコ様、でも……』
『お姉ちゃんでしょ。ほら、言うこと聞けないの？』
長い逡巡の後に小さく呟かれた音は、幼い自尊心をくすぐった。
『……お姉、様』
求めていたものとはほんの少し違っていたけど、それさえも妹の奥ゆかしさを表しているようで可愛くて。
『約束ね。絶対に守ってあげるから』
そう言って強引に小指同士を繋いだ。
――不安げに、でも喜色を隠し切れずに見上げる様が愛らしくて、本当に守ってあげたいと思った。その相手も知らずに。残酷に希望だけを与えて、結局何も出来なかったくせに。
――子どもだったから何も出来なかったの？違うと知っているくせに、言い訳ばかり。

――ほら。今も、何一つ約束を守れていないじゃない。

――また、守れない約束を重ねるつもり？

額に冷たい感覚を覚え、意識が強制的に浮上させられる。

ぼんやりとした視界が徐々に焦点を結び、明瞭な線が浮かび上がった。

それが自分の館ではないと気付き、身体を起こそうとした。

「……っ！」

「斎宮様？！」

「お目覚めに？」

「誰か、主上にお知らせしろ！」

意のままにならない身体に眉を顰めると、額に乗せてあった水に浸した布が褥に落ちた。

自分のものとは思えない思い身体に侍医たちが触れ、脈を取る。

「大分落ち着かれたご様子で、よろしゅうございました。主上もお喜びになりましょう。ですがまずはお体を休めることが先決です」

あからさまにほっとした表情の侍医に対して、申し訳なく思う。

今回倒れたのは明らかに自分のわがままからくる失態で、本来は人の手を煩わしてはいけない。

「ありがとう。もう、大分いいようだから貴方も休みなさい」

その顔を見ればどちらが病人だか分からないほどやつれている。随分と疲れさせてしまったようだ。

「いえ、まだお傍に侍らせていただきます。しばらくはご様子が気にかかりますので」

「迷惑をかけるわね。それで、私はどうしてここに？」

さっと侍医たちの顔に緊張が走った。

「斎宮様、頭が痛んだり身体が動かないようなことは？」

「ないわ。大丈夫。ただの事実確認よ」
高熱が出ると記憶の混濁が起こることもある。酷い場合には脳に障害が残ることもあるらしい。侍医たちはそれを説明すると、何か不順があるときは我慢しないようにと少々きつめに言った。
「では女官を呼びましょう。我々よりも詳しいでしょうから」

「帝がお連れになったのです」
「……やっぱり」
ユウコが倒れたのは斎宮と帝以外は立ち入ることの出来ない場所だった。自力で出てきたはずが無い。とすれば結果は自ずとわかってしまう。
「斎宮様のご様子がおかしい、と言伝があって。眠っておられる間も何度かいらっしゃったのです。
それで…暫くの間こちらでお体を休めるようにと」
「暫く？」
「はい。主上はそうおっしゃっておいでした」
「嫌よ。帰るわ」
「は？」
「屋敷に帰る、と言ったのよ」
そもそもどうして内裏に連れてきたのだろうか。
倒れたのはユウコの屋敷の中だった。それならわざわざ内裏に運び込む必要など無かったはずだ。
それなのに面倒な手順を踏んでまで内裏に戻された。
そこに不穏なものを感じないわけにはいかない。
「……そうですか。致し方ありません」
能面のような顔をした女官は、ぞっとするような冷たい声でそう言った。
それは肯定にも否定にも取れる言い方だ。しかしユウコは自分の行動が否定されたような錯覚を覚えた。

呆然と相手の顔を見返していた間に、背後の扉が次々に閉められた。
「……なっ？！」
「そういうわけには、参りません」
愕然とするユウコをよそに、女官は能面のような顔を崩さずに淡々と言った。
「帝から、そう言われております」

「随分良くなったな。何よりだ」
反射的に振り返れば、そこには今一番会いたくて、反面顔も見たくなかった人。
緩やかに動く空気とともに運ばれてきたのは、愛好する紫煙の香り。
周囲が帝に対する礼をとる中、ユウコは礼儀も忘れて詰め寄った。
「兄上！」
しかし数歩歩いたところで脚から力が抜け、床に崩れ落ちる。衝撃を覚悟したが、それはやって来ず代わりに紫煙の香りがより濃厚になった。
「まだ、本調子ではないのだ。ゆっくり休めと言ったはずだ」
外に出ることも無い割にはたくましい腕に抱えられ、涙がにじんだ。
額に手を当てて熱は大分下がったようだと笑う頬を張ってやりたい。
どういうことだと叫びたくなる。
人の意思を殺しておいて、人の行動を抑えていて、なぜそれほど悠長に構えていられるのか。
そんなユウコの動揺を読み取ったのか、タカオは人払いをした。

衣擦れの音が遠くなり、次第に静寂が強くなる中でユウコは身体の震えを押さえ込んだ。
「……帰らせて下さい」
「帰ってどうする」
「……は？」
真っ直ぐに顔を見返した。なんてことは無い言葉だった。しかしその顔と声音は重々しい。
「帰ってどうする心算だ。またお前は死を願うのか」
死を、願う。
そんなはずは無いと言いたかった。
そんな願いを持ったことは無いと。
「逝かせるものか……っ」
骨が軋むほどきつく抱きしめられ、ユウコは言葉の意味を反芻した。

死を願う。
そうだ。
望んでいたのだ。絶えず心の奥底で。
どうしようもない閉塞から抜け出すことを。
そのためにはそれが簡単な手段だった。
「私を生かしたのはお前だ。お前だけ解放など、するものか」
目の前の人は誰よりも傲慢で我侭。
そして誰よりも優しい人だった。
誰よりも傷つきやすい人だった。
「私が、簡単にお前を逃がすと思ったのか？」
そっと頬に触れた手は、驚くほど冷たかった。その声音もまた、冷たい熱を帯びていた。
「私の腕の中に、飛び込んできたのはお前だ。逃げることも引き返すことも出来たはずだ。
　己の罪が今になって怖くなったのか？」
淡々と紡がれる言葉はユウコに語りかけたものではなく、今まで裡

に閉じ込められていた独白。
頬に添えられた手がユウコの口唇をなぞる。そこから毒を刷り込もうとでもするかのように、繰り返し繰り返し。
「兄上？」
押さえ込んだはずの震えが、蘇ってくる。
一番近くに添っていた心算だった。何かを壊してもどこかを守れていると思っていた。
しかし。
この人をここまで孤独にしたのは、ユウコだ。
「お前は私の側にあれ。それ以外に心を囚われることは許さない」
縛られたのは身体。
壊されたのは――――、何？

泡沫

「お前を、後宮に移す」

後宮に移す。

それが意味することは――――。

刹那の沈黙の後、ユウコは気が触れたように叫んだ。

「いやぁ！やだ、いや…やぁっやっやだぁぁぁ！」

自分がどのように見えているかとか、そんなことは眼中外だった。

そうしなければ大きな流れに飲み込まれてしまうことは分かっていたから。

「やだっいやいやいやいやっ！離して、離してよ！」

めちゃくちゃに身体を動かした。それは普段舞の型を身につけた人間が取る優雅さとはかけ離れた、乱雑で暴力的な動きだ。

「いやぁっっっ！触らないで、触らないで！！」

空を切り続けていた手が、何かに触れた。

それが何であるのかを確認する前に、爪先はその柔らかな肉を切り裂いた。

「……っ！」

それでも拘束する力は弱まらず、顔をしかめたことで力の入った頬から一層鮮血が流れ出る。

それはまるで役者が施す化粧のように白い肌に映え、頬から顎を伝って首筋を彩り、着物に紅い花を咲かせる。

「離してよぉっ後宮なんか行かない…私は兄上のものじゃない！」

「――っ！！！」

それまで抑えるためだけに使われていた力が、暴力的に作用した。

強く肩を押され背中を強か打ちつけたユウコは、痛みに強く目をつぶった。力が弱った隙にのしかかられ、全身で全身を押さえつけられた。

きつく目を閉じた下の頬に、温かい何かがポツリと落ちる。
「では、お前は誰のものだと？」
少し位置を変えてポツリともう一つ。
荒い呼吸の下で、問は重ねられる。
「お前は私以外の誰のものだ。目を開けて答えろ！」
「…私、は……」
震える睫の下から涙が一滴零れ落ち、頬に伝った。その雫は頬に落ちた紅に触れ、そっとその色を変えていく。
「私は」
続けようとした言葉は舌の上で凍りついた。
「続けろ」
「兄、上」
そろそろと開いた瞳は目の前の光景を捉えた瞬間に、最大限に見開かれそのまま固まった。

頬から続く一筋の紅。

ユウコは無意識に、その頬に手を伸ばした。既に血は止まっているように見えたが、その色はあまりに鮮明だった。
震える腕を伸ばし頬に触れようとした瞬間、呼吸が止まった。
自分の爪が紅く染まっている、その理由。
「ユウコ、…お前は誰のものだ？」
「兄上」
「誰のものだ」
「兄、上っ」
「誰のものなのか、と、聞いている！！」
「……主上！！」
兄ではなく、その名でもなく。最後に呼びかけたのは、その位。
たとえ医師であっても、いかなる理由であろうとも、その身体を傷

つけることは許されない。
その命を救うためであろうがその苦痛を取り除くためであろうが、在位の間は決して損なわれることがあってはならない、絶対不可侵の玉体。

その血の一滴までもが絶対的な存在を象徴する。

本能的な恐怖だった。有り得てはならないことに対する恐怖。
「そうだ……お前がこの肉を切り裂いた」
ユウコの恐怖を分かっていて、嫣然と微笑む。
その心を確実に縛るために。
その心を確実に蝕むために。
「私は、お前の兄である前に、この国を統べる者だ」
しんしんと降り積もる雪のように一つ一つは小さかろうとも、確実に心に澱を溜めていく。
それでもユウコは否定した。ただ、己のためだけに。
「…お許しください。私は兄上の妹でありたいのです。……私と貴方は、同じ血を分けた兄妹です」

必死で搾り出した言葉を嘲笑うかのように、艶を含んだ声が重ねられる。
取り去ることの出来ない澱が、溜まっていく。

「この血はお前のものと同じか？」
ユウコの頬に落ちた血は空気にふれ、色を黒くしていた。
それを親指に掬い取り、そのままユウコの唇に押し当てる。
もはや身体にかかる重さは無くなり逃げ出すことも起き上がることも出来るというのに、まるでその意思が沸いてこない。
「同じだというのなら、口に含んでみせろ。その舌で舐め取り、飲み干してしまえばいい」

硬直した体は、幸いなことに口を硬く閉ざしたままだ。唇の上で血が固まり不快な感覚が残っていく。
自分の身体に取り込むことなど、出来るはずが無い。
同じ血を分けた兄妹だというのは、理性が訴える事実だ。
しかし、同じであってそうではない。
帝位に就いた瞬間に、その身体は変質した。
自分と同じものだと知りながらも、その存在価値は、その重みは、その意味は、全く異なる唯一無二のものとなった。
理性ではなく、感情が。
頭ではなく、心が。

それは洗脳とも言うことが出来るのかもしれない。
雛鳥がはじめに目にしたものを母鳥と信じるように、ユウコもまた同じ概念を繰り返し繰り返し教えられることで心の奥底でそう考えるようになった。
帝とはすなわち絶対の存在である、と。
普段の生活では神を否定することも出来る。帝とて血の通った人間だと分かっている。
しかし最終的に帝を最優先に守る。その対象は個人ではなく、帝という偶像だ。
国の中枢にいる者としては相応しくは無い。
国政を担う以上、場合によっては時の帝を廃して政治を立て直さねばならない場合もあろう。しかし皇位継承権を持つ者には、帝に対する絶対的な忠誠が必要だ。
皇位継承権者は、他律的な存在で無ければならない。そうでなければ政治の駒になり得ない。

「お前は、ただ私に従っていればよい」
促されるまま首肯した。
そうしなければならないと、どこかで警鐘が鳴っていた。

「…仰せのままに、主上」

何かが壊れるのではない。
すべてが壊れ、終わった。
しかし新たな関係は始まらない。

動力を失った装置は動き出すことは無い。
そのまま固定され、朽ちるのを待つだけの運命。
甘美なる滅びのときを、ただひたすらに待ち続ける。

泡沫　2

何も考えなくとも、時間は常と変わらず過ぎてゆく。
何もしない時間が長いと感じるのは、その時間に何かをしなければならないと考えるからだ。

内裏の奥深く、外部との接触がただでさえ少ない場所で、ユウコは意図的にすべての情報を遮断した。
聞いてしまえば望まずとも頭は考えてしまう。それを止める術は無い。

もう十分だ。
何もかも。
ここで帝の訪れを待って、ただ生きていくことはそれほど罪だろうか。
たったそれだけで帝の心が安らかにあるのであれば、それもまた臣下の勤めではないか。
幸か不幸か、ここにはユウコの現状を否定するものは一人もいない。
最低限の言葉を交わすだけの侍女たちに囲まれ、ただ生きていればそれでいい。たまに訪ねてくる女御は、どういう説明を受けているのか聞かれたくないと思うことは一切訊ねてこない。
ここでは息をするのがとても楽だ。
安穏と息を吸い、息を吐き、それを繰り返していればいつの間にか一日は終わる。一日の始まりも終わりも、意識せずとも教えられ、そしてそれに頷けはそれでいい。

しかし息をするのが面倒だった。
それをしなくては本当にいけないのだろうか。

もう、生きていくのは面倒で。
でも、死ぬことはもっと面倒で。
だから惰性で生きている。
そこに自らの存在価値など見出せようか。

最も早く入内したこの女性は帝の寵愛もさることながらその人柄は信頼に足りる、というのが宮廷の評価らしい。一部では家格がそれほど高くは無いために中宮候補からは外されているのが惜しいとも言われている。
「庭の椿がそろそろ花を咲かせると思いますの。ささやかですが宴などいかがでしょうか？」
「…キョウコ殿、わざわざお誘いいただいて申し訳ないのですが……」
「あら、駄目ですわ」
あっさりとユウコの言葉を遮り微笑む。決して派手な顔立ちではなく月並みの容姿であるが、野の花のような可憐さがある。
「駄目、ですか？」
「ええ。駄目です。椿の宴は大きくは無いですが、冬の間はこういったことは少ないのですから。
　主上は勿論宮中の方もいらっしゃいます」
穏やかそうに見えて意外と押しは強いらしい。
反抗する気力も無く、ユウコは投げやりに答えておいた。
「……そうですね。…考えてみましょう」
満足そうに微笑む相手に、面倒だと思うよりも仕方が無いなと苦笑

する。
「それも…キョウコ殿の才覚なのでしょうね」
「え？何ですか？」
檜扇の影にさっと口元を隠し、ユウコは顔を背けて言った。
「いえ、お気になさらず」

会話は決して不快ではない。
それは相手が気を使ってくれているからなのだろう。
「……。」
「まぁ、ユウコ様、お疲れですか？」
口元を隠したままで俯いていたのがそのようにとられたらしい。どうせなのでそれを否定せずに黙っていると、やはり話は勝手に進んでいった。
「申し訳ございません。私、少し話過ぎてしまってようですわね？
私は戻りますからどうかお体をお休めください」
そういって慌しく立ち上がり帰り支度を始める。
「…申し訳ありません、キョウコ殿」
善意の塊のような人間を騙すのは、気分のいいことではない。
しかしすべてに先立つおっくうだという感情はいかんともしがたかった。
「そんな、お気になさらず。でも椿の宴はよろしくお願いいたしますね？他の者もユウコ様にお会いするのを楽しみにしておりますので。……あら」

いい人間であることは間違いないが、しっかり釘を刺していくことも忘れない強かさもあるらしい。一瞬頭を抱えたくなったが女御があげた奇妙な声に反応して視線を上げると、たった今あけられた扉の外に帝が立っていた。
「主上。ユウコ様はお加減が優れないご様子ですわ」
略式の礼をとり伝えた女御には答えを返さず、帝はユウコに視線を

投げかけた。
一瞬絡み合う視線で、頭の回線が切り替わる。
「主上、ようこそおいでくださいました。うれしゅうございます」
「気分が優れないというのは？侍医たちが必要か？」
女御の存在を完全に無視して帝は部屋に足を踏み入れ、几帳の影にいるユウコの顔を覗き込んだ。
それは明らかに親密な男女の距離感。
「いいえ。少し休めば問題ありません」
「そうか。無理はするな。……キョウコ」
「はい」
「いつまでそこにいるつもりだ。下がれ」
あたかもそこに邪魔なモノがあるから取り除くかのような冷たさで。
その言葉に女御は泣きそうに顔を歪ませたが、ユウコからは帝が陰になっていてその表情をうかがうことは出来ず、帝はこれまで寵姫と言われていた女を振り返ることもしなかった。
廊下に控えていた侍女たちが青ざめた顔をしていたが、女御は何も言わず早足に立ち去った。

「今日は何をしていたのだ？」
「…何も」
「キョウコとは随分話が盛り上がっていたようだな」
「そうでもありませんわ」
「内容を言ってみろ」
「主上のお耳に入れるようなことは、何もございません。取りとめの無いことを、つらつらと話していただけですもの」
隠し事をしようとしているのではなく、本当に何も伝えるべきことが無いといった風情だ。
タカオが覗き込んだユウコの瞳は何も捉えていない。
黒い瞳は人形のようで、なまじその容姿が整っているだけに見る者

をぞっとさせる何かがあった。
「…ユウコ」
唇を寄せれば従順に受け入れる。
いや、その表現は正しくは無い。
受け入れているわけではなく、拒否しないだけだ。この二つにこれほどの違いがあるとは、こうなるまでタカオは知らなかった。
瞼も下ろされることはなく、何の感情も伴わない口づけは酷く味気ない。
「私は……間違っているのだろうな」
ここ数日で細くなった肩を抱き寄せて、ぽつりともらした。
胸に去来するのは後悔の念と、しかし消しきれない暗い充足感。
手放してやるべきだとは分かっている。
しかしこの手を離してしまったら。
「主上が間違うことなどございません。…主上はこの国を統べる唯一のお方なのですから」
感情もなく淡々と紡がれる言葉は、なおさら胸を痛めつける。
ユウコを捉えその心も身体も縛って己のものとしたのに、結果は一層の孤独を連れてきた。
少なくとも以前のユウコは人形ではなかった。様々なしがらみがあったとはいえ一人の人間として自分に向き合い、帝であるタカオも個人であるタカオも確かに見ていた。
これが代償だろうか。
相手が望むものを分かっていながら、それを踏みにじったことへの代償だろうか。
タカオは腕に力を込めて。一層強くユウコを抱きしめた。
「それでも…私は……！」
この手を離したら、どうすればよいのかわからない。
たとえ完全な形ではないとしても、失うよりはずっといい。
ユウコがその心に何一つ受け入れないとしても、それでもその瞳に映るのは今は自分だけだ。そんなことでこの沼のような浅ましい心

は喜びに震えるのだから。
どうせ、本当に欲しかったものは手に入らなかった。
これ以上ない形で踏みにじられ、汚された。

もはや、自分がやっていることは復讐なのか己の望みなのかわからない。

ただ一つ明白なのは、ユウコの腕が抱きしめ返してくれることはないということだった。
常に生き生きとしていた瞳はどんよりと闇を映し、唇は何かを考える前に相手の言葉を肯定するだけ。
望んだものは、手に入った。
手に入らないものなど、これまで無かった。

この手に取った瞬間に、枯れてしまう花があることなど知らなかった。

「お待ちくださいませ！」
「どなたもお通しするなとの、主上のご命令です」
「どうか表でお待ちください」
複数の足音はどんどんこちらに近づいてくるようだ。
珍しいこともあるものだ。
侍女たちはいつも水の中を進むように移動する。衣擦れの音は聞こえてもその足音が聞こえることなど滅多にないのだが。

「「「皇太后様！！」」」

その言葉を耳に捕らえたと同時に、戸が勢いよく開け放たれ見知った顔が飛び込んできた。

「久しいのぅ。息災のようでなにより」

赤すぎる紅を刷いた唇を歪ませ、笑う女。

若い頃は国一番との声が高かった美貌は見る影を潜め、今はその身に溜め込んだ欲が外見ににじみ出ている。

冬の始まりの空気は凛として思わず背筋が伸びるものだ。その空気がもつ僅かな香りが鼻腔をくすぐるとき、人は厳しい冬への覚悟を決める。

しかしその香りをかき消して、激しく室内に流れ込む香油の強烈な匂い。

御簾ごしに相手をはっきりと捉え、強く見据えた。

久しぶりに頭が冴える。体中に、血液が巡る。

「お久しゅうございますね」

知らず知らずに顔を歪ませ、ユウコは低い声で言った。

「母上」

その応えに、女の唇から黄ばんだ歯と不健康な歯茎が覗いた。

でっぷりと肥えたその身体を下品なほど豪華な衣装で包み、痩せた髪を高々と結い上げ豪奢な簪を挿す。

それで己の力を誇示している心算なのだろうか。

「その目よ。

そなたはいつでも妾に汚らわしいものでも見るような目を向ける。

真の母子であると言うのに」

「…何の御用でしょうか」

どこまでも冷淡に突き放す。

しかし今日はそれを不快に思うことも無いらしく、鷹揚に笑んだ。
「無粋なことよ。母子の語らいに他の目は要らぬ。下がれ」
そういって皇太后は人払いをするが、侍女たちの目は明らかにユウコに許可を求めていた。それが気に障ったらしく、大きな声が上がる。
こうも簡単に激昂するから、鷹揚な態度も着飾った容姿もすべてが安普請に見えてしまうのだと言うことに気付かないのだろうか。
「妾が下がれと言っておるのじゃ！下がりゃ！！」
「しかし…」
「まだ言うか！！」
「……下がりなさい」
決して大きくは無い静かな声でユウコが言うと、侍女たちは躊躇いながらも退出していった。結局はこれが立場の差、見られ方の差というものだ。
「そなたらも下がりなさい」
つと視線を向けると、皇太后付きの侍女たちの数名がその場に留まっている。
「私どもは、皇太后様に従います」
その言葉にユウコは思わず嘲笑を顔に浮かべた。
どうやら先程の言葉はユウコの侍女にのみ向けられていたらしい。別段彼女たちを特別に扱うわけではないが、それにしても滑稽にも程があるというものだ。
「『母子の語らいに他の目は要らない』でしょう？それとも…」
一人では娘と対等に話すことも出来ないのか。暗にそう問いかけると、皇太后はしぶしぶといった様子で人払いをした。
その威光を称える者がいなくなれば、その姿は益々小さく見えた。
この人はどうしてこうなってしまったのだろう。
「そなたは真に妾が憎いと見えるな」
ポツリとこぼされた言葉があまりに小さく、ユウコも思わず呟いた。

「…はじめから、厭うていたわけではございません。母上には、尊敬できる方のままでいていただきたかった」
「…そなたにも、いずれ妾の思いがわかろうよ」
答える代わりに力なく首を振った。

先帝の中宮として数多の女たちのなかで誰よりも早く嫡出の男児と女児を上げ、すべてが思うとおりに進んでいたはずだ。あるいは思うとおりになりすぎたのだろうか。
何があったのかはっきりとは分からない。
しかし母が権力を私欲のために使ったことは確かだ。
後宮の女を次々と殺め、自分の他に唯一子を上げた女は二度と帝に会えなくなった。
どんな理由があろうとも、ユウコは母の所業を認めることは出来ない。
そう思って俯くと、大げさなため息と共に言葉が吐き出された。
「まぁそんなことはよい」

「妾は今日そなたを褒めにやってきたのじゃ」

泡沫　2（後書き）

よろしければご感想お願いいたします。

読んでくださった方々に最大級の感謝を。

泡沫　3（前書き）

注：残酷表現アリ

泡沫　3

「そなたを褒めにやってきたのじゃ」

「何の冗談ですか、それは。面白くもなんともありませんね」
もはや体裁を繕うことさえ面倒で、口元を隠していた扇で左の手のひらを叩いた。パチンと軽快な音と共に扇が閉じられ、両者の視線が互いに譲らずぶつかり合った。
「そうかっかするでない。言葉通りの意味に取ればよかろう」
「如何せん、思い当たる節がないので」
どこまでも冷たい言葉の応酬だが、それでも皇太后はにやりと笑った。
それを視界に入れてしまった瞬間、ユウコは扇を持つ右手を指先が白くなるほど握り締めた。

それは恐怖以外の何者でもない。
これから目の前に晒されるであろう、到底理解し得ないものに対する恐れ。自分とはかけ離れた場所に存在する、意思の疎通を図ることができないものに対する嫌悪。

「そなた……」
粘着質な視線が幾重にも重ねられた衣服を通してユウコの腹部に注がれる。
「これまでよく主上を支えてくれたな」
「……っ！」
そんなことを言われたくは無い。
犠牲を払ってきたわけではない。そうすべきと思ったからしてきただけだ。

「妾に、このようなことを言う資格は無いが……」
自嘲するように言う。
おかしい。
こんなことを言う人ではなかった。
「一体、何を」

皇太后は深々とため息をつき、そして笑った。
「妾はそなたを哀れんでおった」
「貴女に哀れまれるほど、堕ちた心算はございませんが？」
「娘を斎宮にしたことは、残酷であったやもしれぬ…と」
突然の言葉にユウコは眉を顰めた。
立身栄達を願うなら、息子を帝に、娘を斎宮に出来たことは最高の形であったはずだ。貴族に嫁がせれば政局に左右されることもあろうが、斎宮の地位は独立にして帝以外からは不可侵だ。
「斎宮であれば、清い体が求められよう。女としてそれは不幸じゃ」
搾り出すように紡がれていく言葉に、耳を塞ぐことが出来ない。
「そう思えばこそ、砂漠の皇子との婚姻を進めたが…そなたにとっては重荷でしかなかったのだろうな？ずっと思っておった。そなたは真面目すぎると。
　無理に婚姻をさせたはいいが、よくよく考えればそれでどうにかなる問題でもなかったな」
「…母上？」
「無理に母と呼ぶ必要はない。妾は確かにそなたの手本となることは出来なんだ。
　しかしそれでも子の幸せを願っていなかったわけではない……」
「いきなり、何を…」
「そなたが…妾を恨んでいることは知っておる。
　されど妾にはこのようにしか生きられなんだ。どうあっても入内したときから生家のことを考え、危険を排除し…いつしか手を汚すことに抵抗がなくなった」

先帝が寵愛した女を次々と殺め、生家の政敵を排除し続けた。
影の権力者とも呼ばれた女の懺悔は続く。
「妾には主上を救うことは出来ん。あの方のお心はもはや遠い。そなたに触れることも叶わないと諦めておったが…妾ではない、そなたを案ずる者があるならその方が良かろう」
「……一体、どうしたのですか。何を、急に…」
それではまるで。
辞世のようではないか。
「あの、禁忌の子も妾は殺そうとした。その母も。国の歴史にあってはならぬとそう信じておった……」
すべてを諦めたかのようで、それでいて華やかな笑顔を浮かべる。
この人のこんな顔は、見たことがない。

「やめて…」
やめてくれ。そんな懺悔は。
「そんな言葉でショウコは救われない。貴女が殺してきた人は、そんなことでは赦さない。
今更懺悔なんて、聞きたくない！」
「わかっておるわ」
その顔は、今まで見たことがないほど穏やかで。
年老いた手で、ユウコの頬に流れた涙を掬い取る。
「わかっておる。懺悔ではない。これまでも生きたいように生きてきたのだ。死ぬときもやりたいようにやるに決まっておる。
主上はそなたを正式に女御としてたてる御積もりらしい。
聞け。それを阻もうとしておる者がいる。そなた、分かるな？
その者と共に行け。ここにいては、主上諸共、腐り落ちてしまうだけじゃ」
その言葉を飲み込むか飲み込まないかの内に、廊下が慌しくなった。
女官の足音ではない。複数の男の荒々しい音だ。

「…何？」
「ようやっと、おいでになったか…」
状況を把握できずにいるユウコに比べ、皇太后の声は穏やかだ。
そのことが余計に焦燥感を募らせる。
「主上のご命令に背いて来たのじゃ。お咎めがないはずがなかろう？
先程の話、忘れるでないぞ」
通常であればいかに帝いえど母親に容易く処罰を下すはずがない。
しかし、ユウコは先程、おそらく帝にとっては都合の悪い情報を聞いてしまった。
「まさか……まさか、その話をするために？」
自分に逃げろと言うためにここに来たのか。
声が震える。
この人は、子どもなど道具程度にしか考えていないのではなかったか。
こんなことのために、自分の身を危険に晒すはずがない。
「妾に主上を救うことは出来ぬ。しかし、諌めることは出来よう」
答えを聞くことは出来なかった。

荒々しい音と共に、扉が開けられた。殆ど蹴破るといっていいほどの勢いだ。
「…どうしてここにいらっしゃるのか、訳をお聞かせ願いましょう」
熱を感じさせない声で問いかけるのは、帝その人。
その手には、太刀。

「主上！」
「ユウコは、黙っていろ」
一歩、帝が皇太后に近づく。
反射的にユウコは二人の間に割り込もうとしたが、皇太后がそれを阻んだ。
「逃げる心算は、ございませぬ。ですが、妾の侍女たちには罪がない。どうか放してやってもらえませぬか」
言われて視線を走らせれば、皇太后と共にやってきた侍女たちが屈強な男に捕らわれている。その顔は一様に青ざめていはいるが、諦めているようにも見えた。
「言い訳は、せぬと？」
低い声で帝は問うた。
何でもいい。どうか釈明して。
そう切に願った。初めて、母の無事を祈った。
しかしその思いは裏切られる。
「致しませぬ。主上のご命令に背いたことは事実」
すらりと鞘から刀身がその姿を現す。冷たく光を放つ、人を殺めるための道具。
「主上！おやめください！！」
「抑えていろ！！」
その声にすばやく反応して、武官に身体を押さえつけられた。
ユウコの身体を痛めないよう配慮はしているが、どんなに身を捩ろうとも自由にはならない。
「主上、ただ母が娘に会いに来ただけです！ご命令に背いたことは事実ですが、それほどの罪ではございません！」
叫びながらふと思った。
そうして私はこんなに必死なんだろう。軽蔑していたはずの人間が手打ちにされようが、関係ないはずなのに。
「主上！！」
ゆっくりと、帝が振り返る。

その瞳は虚無。
「会いにきていただけ？この女が？そんなはずはあるまい…私からお前を引き離しに来たのだろう？
　これまではその腹を借りた恩も感じていればこそ、好きにさせてきたが…。もはやこれまでだ。何者であろうとお前を奪うものを野放しにはしておけん。
　もともと生家以外からは評判の悪い女だ。殺したところでそう大事にはなるまい」
「そうではなく！そんなことではないのです！」
確かに皇太后を殺めたところで帝の評判は落ちないだろう。むしろ問題の多い母親に己でけりをつけたと評価されるかもしれない。
でも、そんなことをすれば必ず悔やむときが来る。
発端となったのは自分だ。これ以上傷を広げるわけにはいかない。

「……兄上！！」
「お前のそういう顔は、久々に見たな。やはり、人形よりもその方がよい。
　……せめての礼だ。私が直々に手を下してやろう」
笑顔を浮かべたかと思えば、皇太后に向き直って冷ややかに告げる。
その瞬間、悟った。
もう、覆すことはできないのだと。
「主上から死を賜るとは。恐悦至極に…！」
音もなく、刀が振り落とされた。
空気と共に、豪華な衣装と現世とのかかわりを断ち切って。

「あ…。あ、や…いやあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

老いた体のどこにこれほどの鮮血があったのか。
そう思わせるほどの紅い花が畳に、壁に、衣装に咲く。
「母、上……母上、母上！」

もはや武官もユウコを押さえつけることはしなかった。誰の目から見ても皇太后が助からないことは明らかで、手の尽くしようがないとわかっていたから。
「母上！どうしてっ…！」
どくどくと腹から流れ続ける血を止めようと、傷を押さえる。
そのユウコの手さえ赤く染めて、血溜まりはどんどん広がっていった。
「なんで！最後だけこんなことしたって、赦されないだから！」
どうせ悪なら、世にはばかって生きていけばよかったじゃない。
最期に混乱させないで。

「…そなた、は…厳し、ぃ、な」
荒々しい息の下なのに、その顔は穏やかだ。
わかってしまった。
わかりたくなどなかったのに。
「母上は…愚かですっ」
腐った政治を立て直すには契機が必要だ。
これまでの象徴が地に堕ちて、また新たに一から作り直すために。
一族主義と世襲制、寵愛人事の象徴だったのは、この人。政治を立て直すには、どうしても帝の手でそれを断ち切らねばならなかった。
これで国は持ち直すかもしれない。
この人はきっと、後世まで稀代の悪女・腐敗の温床として語り継がれるのだろう。
今日ここに来たのも、ここで散るのも、子どもたちのためだったのだ。

「タカオ、ユウコ……幸、せ…にな」
そう言ったきり、もう二度とその口は言葉を紡ぐことはなかった。

――――――そなたを褒めに来た。
主上にしろ砂漠の皇子にしろ、愛する者を見つけたそなたを、
褒めにやって来たのじゃ。

徒人なれば

部屋にいたのは二人の若い男だった。生家からの使いとしてはあまりに若く、何かあったのだろうかと一瞬身構えた。
しかし御簾ごしに霞むようになってきた目を凝らせば、一人の男の頭はこの国ではない金色であることが分かった。
ああ、これがユウコの。
娘に強制的に迎えさせた夫。
当時は表向き娘以外に身分のつりあう者はいないと言っていたが、実際にはただ娘にそういう対象を与えたかっただけだった。

自分が若いころは息子や娘のことなど何一つ気にかけなかった。
ただ生家から毎日のように届く要請に応えることで精一杯で、それを重ねることで周囲の自分に対する評価が変わっていくことが愉快でもあった。しかしそうして揺ぎ無い地位を確保しふと考えれば、自分が何をしたいのか全く分からなかった。そのときには腹を痛めて産んだ子どもたちは既に母の手を必要とせず、侮蔑に満ちた瞳を自分に向けていた。

そんな折にかの国からやってきた皇子が元服を迎え、妻を娶ることになった。
斎宮である娘は純潔であらねばならない。それはこの国の男であれば犯すことが出来ない禁域である。しかし、異国の皇子なら。

誰も自分の言葉に歯向かうことは出来ない。
初めて自分の望みのために立場を利用した。

その皇子が自分の前に頭をたれて畏まっている。粗末に用意された酒盃は歓迎していないことを気付かせているだろうか。
奇妙なこともあるものだな、と思った。
「面を上げよ」
声にゆっくりと反応して二人が顔を上げた。
「お久しゅうございます、皇太后様。私は右大臣家次男の…」
「知っておる。久しいのぅ、榊。妾が家にいたころはまだ幼子であったが…今では政に携わる歳となったか。お父上はご健在か？」
意図して横に控える砂漠の皇子から話題を逸らす。娘に宛がった男を見定めたいという今更な思いがなかったと言えば嘘になる。
「ありがとうございます。父も相変わらずです。それで…」
「そなたもそろそろ北の方を定めなければならない歳。いつまでも噂を流しているのはお父上も感心しないでしょう」
「ご心配痛み入ります。それで…」
「お初にお目にかかります、皇太后様。リュミシャール国皇子、レイシアと申します。
　本日は皇太后様のお力をお貸しいただきたく、ご足労願いました」
話に割り込んだとは思えないほど堂々とした声。
御簾ごしにでもはっきりと分かるほど、まっすぐにこちらを見ている。
「天帝！！」
友人の無礼に焦ったように榊が声をかけるが、まったく意に介した様子もない。

当然だ。
この皇子がこの国で気を使わなければならない相手がいるとしたらそれは帝くらいだろう。それほどこの皇子が背負っているものは強大だ。
「天帝…とな。成る程上手い名を付けられたものだ。
聞こう、天帝の君。妾の力を貸すかどうかはその後で決める。よろしいな？」
「勿論です。ですがその前に一つ、よろしいでしょうか」
御簾の奥で影が動いた。

その次の瞬間、小刀が顔の脇をすり抜けて背後の壁に突き刺さり、がたりと人が動く音がした。壊れた御簾の間から、琥珀の目が眇められる様子が見えた。
「…いつから気付いておった？」
背後の壁はそう見せかけているだけで、常に護衛の者が控えて中を伺うことが出来るように紙一枚が張ってあるだけだ。今まで気付いた者は誰もいなかったのだが。
「はじめは小さな違和感でしたが、外から見た様子と中からでは奥行きが僅かに異なっていますから。
決定打は畳の幅です。遠近があるので判断に迷いましたが、奥一列のものだけ幅が狭くなっている。ちょうど…人一人が潜める程度に」
「それだけか？それでは実際に潜んでいるかはわからない。誰もいなかったとき、妾に向けて刀を向けた責任、どう取る心算であった？」
「別に」
「天帝！！」
至って簡潔な答えに、横で見守っていた榊がついに声を荒げた。
「耳元でそんな大声を出すな。老人じゃないんだ、普通に話せば十

分聞こえる。
　あぁ、それで？皇太后。別に責任なんか取りませんよ。謝りはするでしょうが」
許可なく勝手に足を崩し、窮屈だなんだといって首元をくつろげる。一応の形式ばった挨拶が済んでしまえば、自分はこの皇子にとって敬意を払うべき存在ではないらしい。
「そなたは…野生の獣じゃな」
「褒め言葉として受け取りますよ。飼い犬になって誰彼構わず尾を振る心算はありません」
飄々と嘯く。
面白い、と思った。誰もが自分の機嫌を伺い傅かれることが当たり前になっている中で、この皇子はなんと自由なことか。
この皇子、何も知らぬような顔をしてどれほどの修羅場を潜り抜けてきたのか。無意識に建物の構造を把握し、巧妙に隠された違和感に気付かずにはいられないほどの。
「ですので、コレも頂くことはできません」
そういって皇子は用意された酒を無造作に床に溢した。強い空気に触れて強い異臭を放つそれは、木目を溶かし緑色の染みを広げていく。
流石にこれには驚愕した。皇子が気付いたことではなく、こんなことがされていたということに。榊は顔色をなくしている。
「これほどあからさまであれば飲みは致しませんが、流石に私でも死にますよ。この毒は」
「……このことは妾の指示ではない」
「存じております。これほどわかりやすい手を使うほど、影の権力者が愚かとは思いません」
それは屋敷の者を管理し切れていないことへの皮肉なのか。しかしそんな表情はうかがうことが出来ない。ただ単に事実を伝えているかのような、そっけなさ。
「榊。傍にいるのも一筋縄ではいかんな」

「……こいつに首輪を付けることが出来るのは、お一人だけですから」

「ユウコが内裏にいることはご存知ですね？」
内裏にいるかでもどこにいるか知らないかでもなく、居場所を断定したうえで疑問を投げかける。
そこに政治的な駆け引きなど存在しない。いっそ愚かしいばかりの清々しさ。
「…いたとしても不思議はないな。アレは斎宮だ。必要があれば帝のそばにおろう」
「そうではなく……、ユウコの意思ではないはずだ。
私はユウコを助け出したい。力を貸してください」
「おい…っ」
あまりに直球な物言いに、流石に榊が肩を揺すった。
それを意に介さず、皇子は思うところを話した。それらの多くはおおよその事実と合っているが、一つだけ皇子にも自分にも判断できないことがある。
「妾には、ユウコの思いはわからぬ。
それにそなたの言う通りのことをすれば、妾はもう一人のわが子を傷つけることになろう」
この言葉に皇子の顔がわかりやすく歪んだ。
成る程美しい顔は歪んでも美しいものか。しかしその口から吐き出された言葉は顔に全く不似合いだ。
「貴女の事情は知ったこっちゃない。貴女の優先順位も同様に。
僕はユウコさえ十全なら後の瑣末はどうでもいいんですよ」
「そなた…数々の浮名を流しておきながら、どの口が」
「僕に厄介な縛りをかけたのはどこの国のどこのお偉方でしょうね？
それに先程から貴女はなにか勘違いしているようです。僕は貴女に『お願い』をしているわけではないんですよ」
一旦言葉を切って、酷薄な表情を浮かべた顔を上げる。

その時初めて先程までは単刀直入が過ぎるとさえ思っていた若造を、恐ろしいと思った。飾らない言葉は、その必要がないから。
「貴女に力を貸せと言っているんです。手荒な真似は趣味じゃない…特に女性に対しては。
いかがですか？皇太后様」
「ほぅ。その身一つで何が出来る。自惚れるでないぞ、砂漠の皇子」
「自惚れ…ね」
場にそぐわぬ面白くてたまらない、といった声で呟きが漏れた。
「そういえば、先程投げた刀、取っていただいてもよろしいでしょうか？女性の側にあるべきものではございませんから」
急に変わった話題には、何か裏があるとも思えなかった。
「僕が中に入ることは出来ません。申し訳ありませんが、お願いいたします」
多少訝しがりながらも壁に深々と突き刺さった小刀を引き抜き、御簾の下から差し出した。

視界に鮮やかな金色。
そう認識したときには既に強く腕を引かれ囚われていた。御簾の内から引きずり出され無様に床に這う。
当然、小刀は相手の手の中にある。
「天帝っ！何をっ」
「来るなっ！！」
腰を浮かしかけた榊を一喝し、砂漠の皇子はゆっくりと視線を上げた。
「ご無礼をお許しください、皇太后様」
「……いけ図々しいわ。手荒な真似は好まぬのではなかったか？」
「勿論、貴女にはそんな真似はしませんよ。貴女が傷つけばユウコが悲しむかもしれない」
そう言って先程奪ったばかりの小刀を、己の首筋にゆっくりと押し当てた。

紅い玉が浮き上がり、筋となって零れ落ちる。
「…気が狂ったかっ！何を！！」
咄嗟に刀を奪い取り、叫んだ。
あっさりと刀を手放した皇子は、嫣然と微笑む。
「さて、人を呼びましょうか？」
「……何？」
傷口を押さえることもなく、鮮血が衣を染めていくのを気にもせず。
「刀は今、貴女の手にある。人が来たら、どう思うでしょうね？」

徒人なれば　2

息子の剣が己を貫こうとしたとき、あれほど覚悟したにも関わらず身体は間違いなく逃げていた。ただそれが追いつかなかっただけで。血など見たくもない。それが己のものであれば尚更。
己が首筋に刀を走らせたあの皇子は、どのような心持であったのだろうか。

「刀は今、貴女の手にある。人が来たら、どう思うでしょうね？」
流れる血など意に介さず、微笑む裏で痛みがないはずがない。
しかし己の価値を把握しているからこそ、それを惜しみなく最大限に活用する。見事、としか言いようがない。
あまりにあっさりと術中に嵌った己に、今更慌てて刀を放り出すことさえ滑稽だ。
脳裏に浮かぶのは、破滅した己。
ある側面から見ればこの皇子の価値は帝をも凌駕する。それを害してかの砂漠の大国が黙っているはずがない。その怒りを静めるためならば、国母の首さえ簡単に差し出すだろう。
比較検討するまでもない、それは当然のこと。

どうやら娘は、思っていた以上に普通でない男に愛されたらしい。

「榊」
「はっ！」

何を言われるのかと身構えた硬い声。いい意味でこの男の感覚は平均だ。
「これまでの事とこれからの事、他言無用と心得よ」
「さて、妾の宮で随分なことをしてくれたな？」
「……これ以上のことが起こるか否かは、貴女次第だ」
「小癪な童じゃなぁ？」
「……っぅ！！」
初めて皇子の顔が歪む。
当然だ。未だ鮮血が流れ続ける傷口に、爪を立てたのだから。
「調子に乗るでないぞ、小童」
より深く。肉をえぐるように。当然紅く染まる自分の手が震えていることに、どうか気付いてくれるな。
「ぐ…ぅっ！」
しかし皇子は自分を攻撃する手を振り払おうとはしなかった。
また、顔をゆがめても視線を外そうとはしなかった。

負けた。
この皇子のために動かないではいられない。
たとえそれが我が子の一方を傷つけることになっても、動かないではいられない。

されどユウコ。
妾はこの皇子の思いを伝えることしかせぬ。
脅されようと何をされようと、そなたの意思はそなたのものであれ。
そなたはそなたのものであれ。

静か過ぎる最期だった。
この人の死に際はさぞや騒がしいものになるのだろうと思っていたのに。
そのことに意外で、でもどこか納得している自分がいた。

「逝ったか」
状況に似つかわしくない落ち着いた声が響く。
畳に広がった血溜まりを一瞥し、一言命令が下される。
「やれ」
その言葉が何を指しているのか、正しく把握してはいなかった。
反射的に叫んだ言葉に過ぎなかったのかもしれない。
けれどユウコは帝の命令を、これまでにない強さで否定した。

「やめなさい！！」

皇太后が連れてきた侍女たちに向かって振り下ろされようとしていた刀が、皮一枚のところで止まった。
僅かに戸惑いを含んだ怪訝な顔を向けてくる武官をまっすぐに睨みつける。
「ここは不浄を嫌う内裏です！これ以上の不浄は神の怒りを買うでしょう。そのような所業に及ぶなど、赦されるはずもない！
　そもそも力のない女を押さえつけて刀を振るうなど、恥を知りなさい！」

帝の命令に背くことに躊躇していた者も、斎宮が語る『神』に刀を置いて膝をついた。皇太后に着いて来た時点で命は諦めていたのだろう侍女たちは、突然変わった流れに反応できず呆然と座り込んでいる。

じっと自分を見下ろす視線に、ユウコは立ち上がって顔を上げた。同じ親から生まれたよく似た顔。しかしその内に秘めるものはいつのにか大きく異なってしまった。

「私は…主上、貴方に従うと申し上げたはずです」

しかしこれは恭順の確認ではなく、非難の言葉。

「殺す必要などなかった。私は言葉を違える心算などなかったのに」

まっすぐに投げかけられた糾弾を、笑顔で受け止めた。

「お前は…涙に濡れて怒りに震える瞳まで、母の血に濡れたその手さえ愛しい。

それはお前の心根が美しいからだ。決して靡かず挫けず、それがなければお前ではない」

「私の言葉が届いていますか?!」

自分の言葉が受け止められていない。そのことが耐えられなかった。わかっていて受け流しているならばいい。腹立たしくはあるが正常だ。しかし無意識にそれを行っているのであれば、一体どうすればいいのかわからない。

閉ざされた世界を、こじ開ける術を誰も持たない。

「やはり、お前は人形ではつまらないな。そちらのほうがずっと良いぞ、ユウコ。

お前を拘束するこの腕にこの力に抗え。

……私を退屈させるなよ?」

生まれて初めて、この人を憎いと思った。

ただ退屈を紛らわすために人を殺め、弄ぶ。

この人が持つ力ではなく、この人が憎いと始めて思った。

『――――、――――――。

貴女が海を越えてからもうすぐ丸十年。貴女がいない雪景色を見るのは未だに寂しいわ。

寒椿の色は鮮やかなままだけど、貴女は今幸せかしら？

私には確かめる術がないので、ただ幸せであることを祈ります。

もうすぐ伯母上のご命日です。ささやかですが今年も法要を行います。

貴女を見捨てた私には、こんなことを頼む資格はないけれど、一言でよいから何か言付けを頂戴。

内親王としてでなくてもいい。

貴女が忘れたいのなら、この国のことは忘れてしまって構わないの。

でも、娘としての一言を伯母上に贈って貰えないかしら。

返事を心待ちにしています。

ユウコ』

我ながら情けない文章にため息を付き、筆を硯に戻した。

１０年間書き続けた手紙に返事が帰ってきたことはない。すべて仕方のないこととわかっていても、心が痛まないわけではない。

あの日以来ユウコは後宮の外に出ることなく過ごしている。
無論、ユウコの意思ではない。
かといって、絶対的にこの状況を受け入れがたいかと言われれば、
それも違う。
母が連れてきた侍女たちは、すべてユウコが引き取った。

あの日起こったことは決して外に漏れてはならない。
ではどうすれば秘密が守れるのか。
簡単だ。目撃者を殺せばいい。事実タカオはその心算で近衛兵を連れてきたのだろう。
しかしそんな暴挙を肯定することなど、出来るはずもない。
一度助けた命には責任を持つべきだ。かといって殺せという帝の命が下っている以上、侍女たちに安住の地などあるはずもない。人目の少ない場所に入った瞬間に無残にも散り果てる運命にある。
ならばいっそあちらの満足がいくように、常時監視を目が届くところに置いてやれば良い。
暴論ではあるが、それは確かに一つの方法だ。

「かと言って…」
今更ぼやいても仕方のないことだとは思うが、こぼれるため息は止められない。
室内に2人。廊下に2人。そして部屋が面した中庭に3人。
これが現在ユウコに付けられている護衛と言う名の監視の数だ。
その他にも当然他の女御や更衣の部屋との境界には、鼠一匹通さぬ検問があり、よくもここまでと苦笑いをしたくなる。
自分には逃げる気がないのだから、これらは明らかにただの無駄だ。
母が自分を逃がそうとして死んだ。否、殺された。
これ以上惨事を繰り返させる心算はない。
息子としても帝としても、タカオの行いは赦されるものではないし、

ユウコとて赦す心算は欠片もない。
思い出すたびに脂汗が流れ、夜は夢で叫び続ける日々。目を閉じればありありと思い出す悲惨な光景。
何も出来なかった。
きっともう一度繰り返されても、何も出来ない。
だとすれば繰り返さないしかない。

だから今日も、帝の呼び出しに応じてユウコは部屋を出る。
数多の者を引き連れて、波打つ黒髪を躍らせて。
手には先程したためた手紙。１０年前から決して返事が届くこのない、一方的な思いを乗せて。

思いを押し付けているのは、兄だけではない。

自分もまた、同じ罪に汚れているのかもしれなかった。

落花の雪に

「これを、今度の使節団に持たせてください」
すっと差し出したのは、妹(ショウコ)に宛てた手紙。
それを見てタカオは眉をひそめた。
「またか。どうせ返事は来ない。アレはそういう者だろう」
「……それだけのことを、したのですから」
タカオは嫌悪を露にしてはき捨てた。
「それだけのこと？それは何だ。
　アレはそもそも存在してはならぬ存在。この国の、皇族の汚点だ。
それをどう扱おうと非難される謂れなどあるか」
「…ともかく、お願いいたします」
ユウコは何も反論しなかった。
悲しく悔しいことではあるが、タカオの言うことはこの国の支配者層が考えていることと同じだからだ。表立って反論すれば、その余波が海を越えて妹(ショウコ)に及ぶ可能性がある。もし妹が海の向こうでユウコが望んだように幸せを掴んでいるのなら、それに水を差すようなことはしたくない。
黙って頭を下げたユウコに、タカオはふてくされつつも文を受け取った。
タカオが何故毛嫌いするショウコとユウコの橋渡しをするのか。
その答えは驚くほど簡単だ。
タカオにとってなんら不利益が無い。それに尽きる。
むしろそれを拒否すればユウコが益々ショウコに執着する。それを見るのは不愉快でしかないのだろう
そこには帝としての考えも、国益も無い。ただタカオ個人があるばかり。

ユウコは母の死を迎えて一つの真実にたどり着いた。
自分が大切に思っているのは兄ではない。
他の多くの者と同じように、帝位を尊重していたに過ぎないということを。

「退屈だ」
人を呼び出しておいてその言い草は何なのか。
「この国には何もない」
ぼんやりと庭を見ながら呟く様は、タカオの中の真実を口にしているのだと分かる。
「私はそのようには思いません」
「……ほう？」
「梅が散り桜が咲きました。もう少しすれば若葉が萌えいずる季節になりましょう。楽しみではありませんか？」
「……。…見飽きた」
それはまるで生きるのに飽きた、と言っているようだ。
ならば勝手に死ねばいい。生きる気のない者を生かしておくほど、元来世界は寛容ではないのだから。
他の誰が相手でも、ユウコはそう言って切り捨てる。
しかしタカオにだけはそう言うことは出来ない。

皇統は男児優先のこの国で、現在直系はタカオただ一人。女児が皇統を継いだ場合には補佐役をおく必要があるが、その人選は極めて政治的であり困難だ。
皇統を安定させるためには、タカオを帝位に据え置くより他にない。部屋の隅の控える重臣たちも、無気力な帝に何も言わないのは、逆上されるのが恐ろしいからだ。
「では書物でもいかがでしょうか。刺激にもなりましょう」
「詩歌や物語の類は殆ど読みきったと知っているだろう。今更目新しいものもあるまい」
「そうではなく、法や政といった学問はいかがでしょうか。多くの考えを知ることは悪いことではないでしょう」
ユウコは以前からこの内裏がその他の場所から隔絶されているのではないかと感じていた。
それは都の外と言った広い範囲ではなく、内裏から目と鼻の先にあるユウコの屋敷とも一線を画しているように思う。それが神性を維持するためなどではなく、存在していることは確かであるのにまるで見えていないような。
「最近ではお認めになるか否かは別として、皇位に関する新たな考え方も出ています。またリュミシャールに移った者たちが興味深い報告をいくつもしていますから、楽しめるのでは？」
「そんなものが面白いのか？」
「少なくとも、知ることなく断じることは出来ますまい。知った上でどのように判断なさるかは主上次第でしょう」
その挑発的な物言いに、タカオが僅かに口の端を吊り上げる。
「いいだろう。…次はそれらを用意して参れ。暇つぶしくらいにはなるだろうからな」
「かしこまりました」
すっとユウコが頭を下げると、大臣の一人が口を開いた。
「おそれながら申し上げます。そのような雑事は主上のお耳に入れるようなことではありません。主上には季節の移ろうこの時季には

お体大事にしていただきたく存じます」
その言い方にユウコはなにか違和感を感じた。
しかしそれを具体的に言葉にする前に、タカオが口を開く。
「お前…私に何を言っている？」
「しかし……」
「わきまえよ。下がってよい。しばらく顔をみせるでない」
伏せられた顔は見ることが出来ないが、僅かに震える拳から感情は察せられた。
軽く視線を走らせると、どの顔も一様に押し殺した不満に彩られている。
――――これは、なに？
ユウコは退室を命じられた大臣が下がっていくのを見送り、タカオに向き直った。
「よろしいのですか？」
「お前もくどいな」
タカオは盛大なため息をついて立ち上がった。
「先程申し付けたように取り計らえ。私は休む」
以前にもまして無気力となった兄の背中を見送る。
少なくとも以前は臣下に対してあからさまにそういった様子を見せることは無かった。
こうして徐々に壊れていくのだろうか。
壊れないでと願ったものが、どんどん手のひらから零れ落ちていく。

「ユウコ様」

後宮に与えられた部屋に戻る途中で、掛けられた声にゆっくりと立ち止まる。
後宮に部屋を持ってから、事実上内裏の中に囚われてから、ユウコを斎宮と呼ぶ者は少なくなった。それがどうしてなのか、その理由は考えたくも無い。
「何か？左大臣」
廊下の先に控えていたのは、先程タカオの不興をかった左大臣だ。これほどの地位の者がいつとも知れぬ帰りを待っていたというのはただ事ではあるまい。
「お話がございます。少々お時間をいただけますでしょうか」
丁寧に頼んでいる形を取っていても、実際に拒否は許されないのだろう。それが分かっているからユウコもあえて歯向かおうとは思わない。
導かれるまま用意されていた部屋に入る。廊下に女官と衛兵が控えているので危険は無いだろう。
「先程のお話ですが、ご再考いただきたく存じます」
「…先程？」
「主上に新たな学問は不要ではないかと存じます。ただでさえ主上はそのお体を気遣って、外国語は言うに及ばず漢詩・論語も就学されておりません。我々としましてはこれ以上お身体にご負担を掛けることは控えていただきたいと考えております」
「我々、と言いましたね？それは参議の総意と考えてよいのですか？」
左大臣は黙って首肯する。
ユウコの違和感は益々強くなった。
「そうですか…。日頃反目しあう者同士が合意に達したとは…喜ばしいことですね。今後もそうであると良いのですが」
強烈な皮肉にも左大臣の様子は変化しなかった。
これを異変と言わずして何と言うか。
常日頃参議の中には己が利益のためあるいは相手の不利益のために、

反目しあう者同士が少なくない。全会一致で物事が決まるなど、滅多に無いことだ。
ユウコは檜扇を開いて表情を隠した。一体、何を考えているのか。
「ご再考いただけますでしょうか？」
「しかるべき理由を提示するなら、考えましょう」
「ですから…主上のお体を思えばこそ」
「それでは納得できません」
はっきりとユウコは言いきった。部屋に焚き染めてある香が鼻に付き、無意識に扇で煙を払う。
「主上は現在お健やかでいらっしゃる。書物を開くことがそれほどお身体に障るとは思えません。むしろあのように緩慢な時間を過ごされることのほうが有害ではありませんか？」

一歩も引かないというユウコの姿勢が伝わったのか。左大臣は明らかに不快気にため息をついた。
「では、ユウコ様は主上にとって書物を開くことに何の意味があるとお考えですか？」
「……は？」
「率直に申し上げましょう。私どもは主上が政の知識を求められるのは百害あって一利なし。国を滅ぼすことに繋がると考えます」
「どういう…ことですか」
言葉の意味を理解できない。
国主が政に関わることは害であると、そう言っているのだろうか。
左大臣は老いを証明する皺を目じりに作って言った。
「ユウコ様、貴女は聡い。
　私も老いました。後は息子に譲る心算です。あれは立派に勤めを果たし国のため主上のため皇族のために力を尽くすでしょう。ですから主上には何らご心配を頂く必要はございません」
「主上に…国政に関わるな、と？」
左大臣の笑みは益々深くなる。

反比例してユウコはさっと青ざめた。
この国はいつからおかしくなった？兄の代？父の代？あるいはもっとずっと前から？
「主上のためを思えばこそです」

主上のため。
国の政に関わることは主上のためにならない。換言すれば、政に容喙するならばただでは済まない――。
これは明確な脅しだ。
凶暴な力を持って人を従わせる。
ユウコは知らず知らずのうちに扇を持った手に力を込めた。
「ならば――」
暴力で以って人を従わせる相手に、どこまで対抗できるかは分からない。だが黙って引き下がることなど出来るはずも無い。
それはユウコの皇族としての矜持だ。
「ならば、私は政に関する一切の文書に御璽（ぎょじ）を使うべきではないと考えます。いえ、むしろそれが正当でしょう。主上が政に関わらないのであれば、御璽を用いて民を動かすのは民に対する詐欺に他ならない。
今後は参議各位の名で文書を発するべきでしょう。……勿論、国外に対しても」
「…っそれ、は」
一瞬で左大臣の顔色が変わった。
御名御璽（ぎょめいぎょじ）を用いて政をするならば、失策を責められるのは帝。かの大国との関係においても、責任を取るべきは帝となる。国政の中心のことはその場にいる者にしか見えない。左大臣たち参議は自らは一切の責任を負うことなく、国を我が物にしようと企てたのだ。
「如何かしら、左大臣。私の言葉は間違っていますか？」
ユウコは何も帝が政治を行うことが最良だと考えるわけではない。むしろタカオには一切のやる気が無く、また知識もない。

しかし知識は補えばいい。
帝以外のものが政治を行うのならば、責任の所在は明確にしなければならない。それが為政者としての義務だ。名を持たない者は責任を取ることが出来ないのだから。
「主上が政を勉強することで不利益を被るのは民ではなくあなた方ではありませんか？既得権益がなくなるかもしれないから、あるいはより都合のわるいことが露見するから、主上に停滞を求めるのでは？」
まっすぐな視線を受けて、左大臣の老獪な顔が醜く歪む。
そこにはまぎれも無い憎悪を嫌悪が浮かんでいた。
「…内親王として斎宮として、お言葉は慎重であるほうが望ましいかと」
「仮に参議各位が政をするにしても、主上の責任がなくなるわけではありません。参議の任命にかかる責任は負って然るべきでしょう。ですが個々の政策に対する責任は担当の為政者にかかるべき。
　主上を隠れ蓑にしようというのは、むしが良すぎるのというもの」
これ以上の話は無駄だろう。
そう判断して席を立つ。
「ユウコ様っ！」
どこか必死な左大臣を睥睨し冷たく言い置く。
「安心なさい。私は今の話を主上に申し上げる心算はありません。参議各位はこの国に必要な人物です。今後はより有意義な話し合いの場を持ちたいものです」
互いに全く譲らない視線がぶつかり合う。
破裂しそうな緊張を破ったのは、左大臣の嘲笑だった。
「まぁユウコ様の最後の政治指導として、心に留め置きましょう」
「……何？」
「正式に後宮に入られれば、政治に介入することはできません。まったく、惜しいことですなぁ？」

正式に後宮に入る。
話が見えない。
「帝はユウコ様を正式に入内させると仰せです。まさか、まだご存知なかったのですか？」
白々しい言葉にユウコは目の前が真っ赤になった。
怒りに拳が震える。
「許されるはずが…ないっ」
搾り出した言葉を左大臣は一蹴した。
「何故ですか。至高の存在である帝が望まれるのです。……帝が望まれるのであれば、黒も白になるのですよ」
歪んだ微笑みが、焼き付いた。

落花の雪に（後書き）

本当に受難なヒロインです……。

ご感想大歓迎。誤字脱字のご報告もよろしくお願いします。

落花の雪に　2

助けて。
お願い、誰か。
誰か助けて。

鮮やかな手並み、としか言いようがない。
左大臣からとても受け入れられないことを聞かされ、真偽の程を確かめなければと思ったときにはもう遅かった。
「では、もう一度お聞かせ願えますか？」
白髪の老人が筆を片手に温和な表情で言う。
「ええ。何度でも」
「では、えー、思い出せる限りでそのときの状況をお願いします」
帝による母殺し。
これは国にとって看過できる問題ではない。当然に事実を詳らかにしなければならないことだ。
その理屈は理解できる。だから拒否は出来ない。
むしろそれを言い出したのが事件の当事者たる帝だと言うのだから、高潔な精神だといえるだろう。
「母上は私の部屋にいらっしゃいました。供の者は皆、部屋の外に控えていました」
「それは何故ですか」
「母上と私がそれを望んだからです」

結末は見えている。
国に仇なす母を涙を呑んで切り捨てた帝。
それ以外にありえない。
すべては予定調和だ。
それでも拒否は許されない。
たとえその間に、入内の準備が進められているとしても。

「やつれたね」
薄暗い部屋に入った榊は思わず眉を顰めた。
灯りは落としてあるというのに、影と雰囲気がすべてを物語っている。
華やかな金糸の髪さえ、僅かにその色がくすんだように見えた。
「……。」
榊の言葉がやっと届いたとでもいうように、緩慢な動作で顔が向けられる。
まるで手負いの獣だ。
傷ついているといのに眼光だけは炯炯として、余計に鋭さを増している。
「帰ったほうがいいかい？」
「……聞かせろ」
「正直、旗色は悪いよ。何て言っても帝の希望と左大臣一派の賛成

がある。倫理や道徳振りかざしても、いつかは飲み込まれるだろうね」
多くの貴族にとって、ユウコの入内は寝耳に水だった。
同母の妹を帝を望むなど、あってはならない。
おそらくは母を失ったばかりの帝の一時の気の迷いだろうと思われていた。すぐに収束する騒ぎだと。
しかし実際に御前に詰めてみれば、左大臣が賛成だという。未だに帝も翻意していない。
ユウコ内親王は帝の母殺しの一件で忙しいらしく、意思は確認できていない。
旗色良好とは言えなかった。

「君は、どうする心算だ？」
「さて……どうするか」
榊にはこの気のない返事も理解できなかった。
立場上口にすることは憚られても、この友人が内親王を思っていることは知っている。
なのに何故この状況で動こうとしないのか。
「君が故国に掛け合えばいいだろう。すべて解決するはずだ」
すべて、という言葉には御幣があるかもしれない。
しかし大国を敵に回してまで帝が妹を望むというのなら、それは君主のあるべき姿ではない。
それを諌めることが出来ないなら、この国は狂っている。
「今更、どの面下げて」
自嘲気味に笑う様子に思わず声を荒げた。
「体裁なんかどうでもいいだろう！そんなものに拘っていたら失うぞ！」
詰め寄って胸倉を掴む。
抵抗なく僅かに浮き上がった上体と、力なく反った首。しかし表情は鋭かった。

「なら、お前らは何なんだ」
ひやりと首筋から背中に冷たいものが流れ落ちた。
「禁忌なんだろう？同母の兄妹が睦み合うのは。斎宮は純潔でなければならないのだろう？今お前も口にしたように、リュミシャールとの関係が悪化するのだろう？
これだけの理由が揃っていて、何故旗色が悪くなる。何故正論が通らない。
お前が望んでいるのは、僕が故国に掛け合うことで他力本願な解決じゃないのか？」
底冷えするような声で言われたことは、それこそ正論だった。
思わず手の力が緩むと、するりと衣が滑る落ちていった。

力なく去っていく榊の背中を見送りながら、どうしようもない嫌悪感に襲われた。それはどう誤魔化しても、自分に対するものだった。
榊に向けた言葉は正論だ。
だがそれ以上に自分の中に言い訳が燻っている。
動くことが出来ないのは、自分の望みが分からないからだ。
後宮に入るのはユウコの意思ではないと思う。
ではそれを阻むためにリュミシャールの力を借りることを望むだろうか。
皇帝である兄は甘くはない。
頭を下げればオースキュリテにもレイシア本人にも何某かの要求を

突きつけてくるだろう。
では、国家間の約定であるレイシアとユウコの婚姻が破棄されたと知ったら。
ただで済ませるはずがない。
下手をすれば戦になる。

そこまで考えて頭を抱えた。
結局何をすればいいのか分からない。
空回る思考は断ち切ろうとしても出来るものではない。
何がしたいのだろう。
これが、何もせずにただ生きて来たツケだろうか。

――――「惨い。あの方は、なんて惨い」

――――「あの子さえ、生まれなければ。あの子さえ、産まなければ」

――――「しかし、この母も惨い。お前は、なんて哀れな子」

――――「お前が、私の子だというのか」

――――「喜べ。お前にも生きる道がある」

――――「行け。私の前に二度と現れるな」

――――「お前が、母上の御子か」

――――「今のこの国に、お前の生きる道はない」

――――「お前もまた、私の被害者か」

「……っ！！」

大きな音で目が覚めた。

薄闇の中で目を凝らすと、横にあったはずの小卓が倒れていて酒瓶が転がっている。派手な音は自分がそれを倒したからだろう。右腕が痛む。

息が白くなる季節だというのに背中にはじっとりと汗をかいている。鼓動がうるさくこめかみに響いた。

長らく見ることのなかった夢だった。

嘆く母と歓喜に震える父。無感動な兄。

振り切ったはずの思いが重く心に圧し掛かる。

口では故国などどうでもいいと言いながら、いざ切り捨てようとすれば迷いが生じる。

ここで自分が無分別な行動に走ったら、何と言われるだろうか。

母は嘆くだろうか。

兄は蔑むだろうか。

そして、ユウコは何と言うだろう。

ポツリと涙が零れ落ちた。
何も出来ない自分は、子どものままだ。
促されるままに生きてきて、図体ばかりが大きくなった。
ユウコが必死で磨いてきたものを、自分は何一つ持っていない。
側にいる資格などありはしないのに、離れることも出来ない。

もう、一歩も動けなかった。

落花の雪に　2（後書き）

久々の更新です。
よろしければ叱咤激励、誤字脱字報告お願いします。
感想・レビュー熱烈歓迎です。

落花の雪に　3

細く開けられた扉から光が目に刺さる。
薄暗がりに慣れた目には、御簾越しの光さえ痛かった。
「殿下……」
こちらを刺激しないようにと気遣われているのが分かる声だ。
大きな声で呼びかけられたら今はたまらなく不愉快だ。かといって、それを叱責するほどの気力もないが。
「殿下？」
「……なんだ」
一瞬自分の声だとは信じられなかった。
喉が焼けるほど強い酒を飲み続けて、酒の肴が煙草だとこうなるのか。
「表に内裏からの使者の方がお見えですが……」
「決まっているだろう。追い返せ」
「ですが……」
妙に歯切れの悪い家人の様子に流石に身を起こす。
吐き気と頭痛は気のせいと思い込むことにした。
「必ずお目にかかると……屋敷が囲まれています」

「これほど仰々しいお迎えは初めてですよ。このようなあばら家へようこそ」

大袈裟な身振りとともに痛烈な皮肉をぶつける。
茶番だとしか思えなかった。
「おい。皆様に酒でも振舞って差し上げろ。塀の上から酒瓶でも転がせば手っ取り早いな？」
後ろに控える家人にそう言うと、流石に使者は渋面になった。
いい気味だと思う。
屋敷を囲むなど、まるで謀反人の扱いだ。
それで平和的な話合いが出来ると思うのが間違っている。
「随分…酒気がございますな？天帝の君」
「酒は和をつくるというではありませんか。まぁ、貴兄との間には望むべくもないが」
「水でも飲まれるがよろしかろう。少しは頭も冴えるでしょう」
「せめて酒がなくなるまで外で待っていて欲しかったですね。急いては事を損じましょう」
わざと相手を煽る様な言い回しで会話を繋いでいく。
急いては事を損じるとは自分に対する戒めだ。
今にも破裂しそうな言葉のやり取りに耐えられなくなったのは、相手のほうだった。
「内裏にお越しいただきます」
ぎりぎりと歯噛みするような声で言う。
全く頼まれているという気がしないのは気のせいではないだろう。
「嫌だ、と言ったら？」
陳腐だなと自分でも思う。
しかしこんな場合でもなければこんな台詞は口にする機会もないだろうから、半分口を笑いの形にして問いかける。
「言えないでしょう。状況を考えれば」
勝ち誇ったような顔が滑稽で、嘲笑を浮かべないようにするのに苦労した。
「状況、ですか。確かに、屋敷を囲まれてまぁ酷い話だ。このことが故国に知れればただでは済まされないでしょうね？」

「我々がよもやそれを恐れるとでも？」
「矛盾ですよ、それは」
外交問題になることさえ辞さないという相手の口ぶりに対して、あまりにも軽い返答だった。
虚を突かれたような顔が哀れで一瞬湧いた仏心を殺す。
「貴兄は言われたことを伝えているだけでしょうから、罪はないのですがね。
　おそらく僕が今内裏に呼ばれるとしたら、まぁ主上とユウコのことをリュミシャールに認めさせろとかそんなことでしょう。リュミシャールをどうでもいいと言うなら、そんな真似はいらないはずなんですよ。貴兄は兵を移動させる権限は与えられていても実際に兵を動かす権限はないでしょう？ほら、行動と言動の矛盾が露呈した。
　だから僕はその手札では動かない。さぁ、次をどうぞ？」
どうぞ、と言われてそうですかとはいかない。これは面子の問題だ。
そんなことは分かりきっていたが、ささくれた気持ちはどうにも納まらず酷い言葉を投げつけた。
荒々しく男が立ち上がる。予想通りすぎて笑いたくなった。
「あまりに礼を欠いた物言いだ！失礼する！」
「ええ。どうぞ。出口はあちらです。見送りませんよ」
図星を差されて逆上するのはいただけない。
しかし所詮男なんてそんなものだ。行動の基準は善悪ではなくどちらがより自尊心を傷つけずに済むか。愚かだとは思うが、仕方ない。

「ああ、結構！全く、榊の君の気が知れませんな！」
「は？」
相手にしてみればただの嫌味だったのだろう。
しかし聞き捨てならないような言葉だった気がする。
思わず眉根を寄せた顔を見て、相手は鬼の首でも取ったかのように言った。
ここに来て本来の目的は忘れ去ってしまったらしい。

動揺した、ということは有効な手札になりえるということだった。
「一人帝に直訴したのですよ。ユウコ内親王と貴方の婚姻を破るべきではないと。血気盛んな友情には関心しますが、全く愚かだ。お怒りを買って今は軟禁中とは、お家に泥を塗ってしまった」
顔を真っ赤にして嘲る男はもう視界に入っていない。
数日前酷い別れ方をした友人の背中が思い出された。
分が悪いことは分かっていたはずだ。
それなのに何故そんなことをしたのか。
男の弁ではないが、それは愚かだとしか言いようがない。
「……ああ。そういうことか」
やられた、と思わず小さく声が出た。負けを認めるのは非常に悔しいが、今回は完敗だ。
少し考えれば分かることだ。
底抜けの善人だ。ある意味阿呆だ。それが榊という男だった。
「あー、ちょっと待て。同行しよう」
酒と不摂生な生活のせいでふらつく足を叱責して立ち上がる。
リュミシャールを出たときはまだ子どもだったのであちらでの比較はできないが、この国ではかなり長身の部類に入る。
必然的に見下ろされた男は思わず一歩退いて唸った。
「急に何を……」
「別に説得に応じたわけじゃ…いや、ある意味そうなるのか。馬鹿な友人の必死の行動に報いないわけにはいかないからね。
悪い話じゃないだろう？君の面子も立つし」
「馬鹿にしているのか！いい加減にしろ！」
体裁だけは整えた言葉を取っ払って、居丈高に命じる。
「四の五の言わずにそこで待っていろ。まさかこの格好で参内するわけにはいかないだろう？」
流したままの髪に糊の取れた服。
染み付いた煙草の臭い。
自覚はあるが悲惨だ。

どうせ屋敷を囲んでいる兵を動かすだけでもあの程度の風采の男なら暫くかかるだろう。少し時間を与えてやったほうがいい。
身なりを整えるために部屋を出て歩きながら思う。
榊は善人だが、あまりにも行き過ぎている。
これまでは幾度となくそれに甘え頼ってもきたが、こんな竹篦返しは予想していなかった。
レイシアがユウコを想っているのを知っている。それでも動けない立場も分かっている。
だから強制的に動かした。
流石に友人が軟禁されていると聞いて黙っていられるほど薄情ではない。
悔しいがそこまで読まれていたとしか思えなかった。
おそらく軟禁されている榊は思い通りにことが運んだと知れば、一人会心の笑みを浮かべるのだろう。そんな場面までありありと想像できてしまう。
「……安い芝居だ。大根役者しか揃っていない」
悪態をついてもどうにもならない。
人を振り回すのが専門で振り回される趣味はユウコ以外になかったはずだが、思うままにならない世の中だ。

しかしどこか晴れ晴れとした気分だった。

本当は言い訳をしている自分に気が付いていた。
立場上動けないとか、外交問題になるとか。
そんなことはどうでもいい。
怖かっただけだ。

切り売りされるようにやって来たこの国には何もないと思っていた。
そして自分を切り捨てた故国にも何もないと思っていた。
今ならわかる。

それ以外に手段がなかったのだと。
必死の外交努力を重ねて、最も被害の少ない方法がこれだっただけだ。

そしてこのオースキュリテでユウコに出会った。
黒い髪に黒い瞳の、初恋だった。
そして、今日終わるかもしれない最後の恋。
崩れることのない凛とした瞳、それを支える強い意志。
生まれの上に胡坐をかいていた自分には眩しかった。
僻んでいたのだと思う。
それ以外に伝える術を知らなかった、なんて言い訳にもならない。
やがて長じて間違いに気が付いたときには、修復できない関係が出来上がっていた。

決定的な答えを聞くのが怖くてはぐらかしてばかりいた。
でも、もう終わりにしよう。
ユウコが望むなら、終わらせる。

故国よりも両国の万民よりも、ユウコの願いを叶えてやろう。

君がため

時が止まったような場所だ。
纏わり付く粘着な空気をかき分けるようにしか進めない。
通気性の良い造りは囁く声さえ阻まない。
笑いさざめく姿の見えない人々。
内裏は決して変わらない。それ以外のものを認めない。

「ユウコに会わせて下さい」
ざわりと場が揺れる。
同じ言葉を繰りかえし、それ以外は視線さえも動かさない。
見据えた先には御簾。その奥にいるであろう帝。
脅迫交じりに促された行動はせず、ただそれだけを言い続けた。
「ユウコに、会わせて下さい」
ユウコが望むなら、故国にいくらでも頼んでやる。
国交に支障をきたすな、外交問題にするな。
言われるままに妻も娶ろう。
だから。
「ユウコに会わせて下さい」

通された場所は清涼殿の程近く。

帝の日常生活が営まれる場所にユウコがいるという現実を突きつけられれば眩暈がする。
帝がユウコとの面会を許したのは、単に根負けしたからだろう。
あの無気力を絵に描いたような人間が、外交問題など気にするはずがない。
ただ引き下がる気配の無い様子に焦れて相手をするのが面倒になっただけだ。
ふと思う。
その手間とユウコを秤にかけて、ユウコに傾かない程度の気持ちなのか、と。

「こちらにどうぞ」
先を歩く侍従がある一室の前で立ち止まり中に促した。
散漫な思考を正して深く息を吸い込む。
「……っ！」
その臭いを嗅ぎ分けたと同時に、戸に手をかけて力で押し開けた。
横に滑った戸がぶつかり乾いた木がぶつかり合う音が静かな空間を破壊する。しかしそれよりも際立って異様なのは、室内から零れだした独特の臭いだった。
「どういう心算だ？気が付かないとでも？」
ひっと喉の奥で悲鳴を上げる侍従を許さずに襟元を掴みあげる。
薄暗い室内からは濃厚な甘い香りが漂っている。纏わり付くような重い甘さの香は気分を落ち着かせる効果もあるが、強くなれば身体の自由を奪うものだ。
室内に充満した香りは明らかに後者の用途だろう。
この期に及んでまやかしを使おうとする宮廷に苛立ちを感じずにはいられない。
「眠らせてどうする心算だった？答えろ」
「ぐうっ、あ」
力に任せて侍従を吊り上げる。

続く不測の事態に気が高ぶっている自覚はある。
赤黒く変色する顔を見下ろしながら、どうなってもいいと残忍な気持ちになった。
どうにでもなれ。
これくらい、何の問題にもならない。
これから差し出す代償に比べれば、何と些細なものか。
意識せずに口角がつり上がる。もっと苦しめばいい。自分と、同じくらいに。

「……誰か…いるの？」
誤った嗜虐心は室内から零れた囁きによって雲散霧消した。
頭で考えるよりも早く足がそこに向かう。
「ユウコ！」
声を頼りに薄暗い室内を進む。
天井から吊るされた蚊帳のような布や御簾をかき分けていくと、それに応じて益々臭いがきつくなっていく。
こんな中にいて、平気なはずがない。
様々な疑問が渦巻いたがそれを精査している暇はなく、手に触れた布を握りしめ引きちぎるように外していく。
布が裂ける音とともにふわりと空気が動き、支えを失った布がゆっくりと床に落ちてとぐろを巻いた蛇のような形を作り出した。
「ユウコ！」
呼ぶ声に応答はない。
布が遮っていた光が入ってくると、部屋の異様さがより際立った。
幾重にも張り巡らされた布は、香を逃がさないためだろう。
内親王であるユウコを拘束することは出来ない。ましてや入内しようという女性だ。手荒に扱うなど出来るはずがない。
だからといってこんな手段が許されるか。
怒りのままに進んでいくと、手が布ではない硬い感触にぶつかった。
美しい木目の格子の奥にぐったりと力なく横たわる姿を見て、一瞬

で思考が沸騰する。
「ユウコ！！」
格子は揺すってもびくともしない。
部屋を二分する格子は、どう贔屓目に見ても堅牢な座敷牢だ。
ユウコの反応は緩慢で、音には反応しているが視線が定まっていない。
おそらく長い時間香を吸いすぎたのだろう。
無意識の舌打ちとともに踵を返すと、中途半間に残っていた御簾や垂れ下がった布を力ずくで引きちぎり、蹴破る勢いで扉を全開にした。
少しでも空気を入れ替えなければならない。付いてきたはずの侍従がいなくなっていることは予想の範囲内だ。おそらく人を呼んでも誰も来ないだろう。
焦ってもつれる脚を叱責して急ぎユウコの元に戻った。

光を遮る余計なものがすべてなくなってしまうと、より明確に部屋の様子が把握できる。
格子は部屋を二分しているだけではなく四方をすべて囲んでいて、出入り口には三重の鍵が掛かっている。
座敷牢を破壊しようにも、流石に刀は内裏に入るときに預けてある。
力に任せて格子を揺すろうが殴ろうがびくともしない。
「っつ！」
身を切るような冬の風さえもどかしい。
早くこの甘ったるい毒を消し去ってくれと願うしか出来ることはなく、無意味と分かっていても懇親の力で木の格子を殴り続けた。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。
少なくとも、日が暮れて夜空に月が浮かぶくらいの時間。
手が赤く腫れ、皮が裂けて血が流れるくらいの時間が過ぎた。
冷たい風に晒されて体はすっかり冷え切っている。ユウコの体も同

じだろう。
大切にされていると思い込んでいた。
道ならずとも、請われてここにいるのだと思っていた。
なのにこれは一体どういうことなのか。省みられることなく、心のない人形であることを強いられているとしか思えなかった。
こんな姿を見るために、手を放すと決めたわけでは決してない。
「……泣いて、いる…の？」
風にまぎれそうな小さな声を聞き逃さなかったのはずっと待ち望んでいたものだからだ。
「ユウコ！」
「泣いて、いる…のね」
ゆっくりと漆黒の瞳が焦点を結び、気だるげに長い髪が揺れる。
月明かりの下で見てもやつれたとはっきり分かる顔に、抑えていた感情が堰を切って流れ出す。
あまりの痛々しい姿に顔を伏せるしかない。
「こんなことになっているなんて…どうして」

どんな言葉も白々しく感じられて舌の上で凍りつく。
どうしようもない無力さに押しつぶされそうになった瞬間、小さな手がそっと差し出された。
「……泣かないで？」
震える手が頬を濡らす涙をぬぐう。
それが限界だった。
半ば床に伏せられていたユウコの身体を引き、粗い格子ごしに抱きしめた。
傍から見れば酷く不恰好で滑稽だろう。
「…っ君は、泣くべきだ！」
こみ上げそうになる嗚咽を大きな声で誤魔化した。
服の上からでも痩せたと分かる身体と艶を失った長い髪。
「君がこの国に尽くしても、何も与えられるものなんかない。君は

こんな風に貶められるべきではないだろう！？」
「……。」
「頼む。頼むから、逃げたいと言ってくれ。何を犠牲にしても叶えてみせるから」
この言葉にユウコが僅かに身じろぎをした。
しかし淡い期待は一瞬で打ち砕かれる。
ユウコの腕がゆっくりと身体を押し返したとき、答えを悟った。
「違うの」
「聞きたくない」
不自由な体勢であったから距離を置かれたことには抵抗しなかった。
しかしその先の言葉には抗う。
「私がこの国を辱めているのよ。道ならぬとわかっていても……お兄様をお慕いしているの。お側にいたいと我侭を言ったのは、私」
「……聞かせないでくれ」
掠れた声の調子は間違いなく懇願。
そこに悲哀が混ざるのは決して聞き届けられることはないと混乱した頭でも分かっているからだ。
ユウコの言葉が嘘だということは分かっている。
状況にそぐわない言葉を信じられるほど、素直ではない。しかし嘘をついてでも守りたいものがあるのだということは分かってしまう。
「……貴方のことを、好きになれればよかった」
静かに落とされた言葉は最後通牒以外の何者でもない。
好きになれればよかった。
何て残酷な言葉だろう。
形だけの関係にユウコの意思などなかっただろうに、それでも努力をしてくれていた。好きになるための努力を。それを以ってしても出来ないのなら仕方がない。
結局はすべて一人相撲だったのだ。
「それが答えなのか？」
既に旗幟は鮮明にされた。更なる言葉を求めるのは気持ちにけりを

つけるためだ。
そう出来る自信は全くないが、それでも門出を祝ってやるのが最後の意地なのかもしれない。
「……貴方はもう、自由になって」
「わかった。…今までありがとう」
一体何から自由になれというのか。
これから待っているのは空虚な余生。
それと引き換えにユウコが幸せを手に入れるのならば、それいいとさえ思える。
それくらい、愛している。
愛していた、にはきっと一生ならないだろう。

顔を上げることは出来ない。
ユウコの顔をみればその意思を殺してでも、手に入れたいと願う心があると分かっている。
「君の幸せを願うよ。僕は…君の人生から消える」
「……っ」
最後に格子をきつく掴んだ小さな手を外し、そっと唇で触れた。
不快に思われない程度のほんの短い時間。
これがユウコに触れる最後だろう。
「……もう会うことはないだろうね。君の事が好きだったよ…本当に」
せめて過去にしてやろう。枷を外してしまおう。
この先交わることのない人生なら、それしか出来ることはない。
これ以上ここにいても未練が残るだけ。
そう判断して立ち上がる。月が雲に隠れてユウコの顔が見えなかったことに安堵し僅かに悲しかった。
背を向けて歩き出す。
ユウコがほんの僅かでも別れを惜しんでくれればいい。そんな女々しいことを考えながら。

「……レイシアッ」
思わず足が止まった。
それはこの国にきてから呼ばれることのなかった名前。
このまま風化していくのだと思っていた言葉。
殿下ではなく天帝の君でもなく。
誰にでも与えられる貴方でもなく。
レイシア、と。
振り返ってしまった自分を誰が責められるだろうか。
強い風が雲を押し流し月明かりが夜を切り取る。
出してしまった言葉を取り戻そうとするように口元に手が当てられていても、その表情は誤魔化せない。
驚愕と。
絶望と。
悲嘆と。
愛惜と。
それらすべてが綯(な)い交ぜになって現れているのは、止められない激情。
それが何を示すのかはっきりと分かるくらいには、長い間追いかけてきた。
仕草や表情を見続けてきた。

「それが、本当の答え？」
疑問の形は取っていても、これは半ば断定だ。
すっと霧が晴れていくようだ。
答えはこんなに簡単だったのに。
ユウコが紡ぐ嘘に囚われていたのは、自分だけではない。ユウコ自身もまたそうだったのだろう。
拒絶の色が浮かんでいるのではないかと目を背けてきた。ずっとそれを恐れてきた。

だが瞳を見ればこんなにはっきりと訴えていた。
助けて、と。
「ごめんなさいっ忘れて…お願いだから」
これが肯定以外の何だというのか。
助けて。
巻き込みたくない。
そのままにしておいて。
こんなに分かりやすい表現だったのに、見落としていたなんて。
「君以外には、何もいらない」
これまでも伝えてきた心算だった。
それでも伝わらないのなら、行動で示すまで。
「そんなの駄目！…絶対に許さない」
「君に許してもらおうとは思わないよ」
愕然とした顔で見上げるユウコに笑いかける。
「理解してくれなくていい。目指すものが違うのだから仕方ない。
ただ、受け入れてくれればそれで十分だ。
　僕は君を助け出す。この牢からも、この国からも」
大それた事を口にしていることは分かっている。
言い逃れが出来ない罪になるだろう。
だがそれが何だ。
国家間の和平なんて下らない。
「望まないわっ！」
激昂し叫ぶ姿さえ愛しい。それを守る行為が罪だと言うのなら、いくらでも罪に問われよう。
皇子という身分もいらない。
二人でただの個人になれたら、どれほど幸せだろう。

「……時間切れかな」
遠くで僅かに床が軋む音がする。
流石に放置しておけない時間になったのだろう。

「何？」
「……ユウコ、もう一度名前を呼んでくれないか？」
唐突な願いに聞こえたのだろう。
迷いを見せるが急きたてるように膝をついて、格子の間から手を差し込んで頤を掴むと視線を合わせる。
「呼んで」
「貴方は馬鹿よ…レイシア」
長い間乾いていた。
欲しかったのは一掬の清水。たったそれだけでこんなにも潤う。
ゆっくりと微笑むと、自分の指を口に含み薄い皮を噛み千切る。
地位も身分もなくすかも知れない。だから誓えるものはこれだけだ。
頤を掴んだ手に僅かに力を込め、血が流れる指をユウコの口唇から差し入れた。
「君が呼んでくれる名前と、この血に誓う。必ず君を助け出す」
いよいよ近くなる足音に立ち上がり歩き出す。
自分の顔に笑みが浮かぶのを止められない。
もう、迷いはなかった。

途中で行き会った従者を連れて帝の元に戻り、レイシアはユウコの入内を認める旨の返答をした。

君がため（後書き）

ようやくもやもやした関係から抜け出せそうな予感です。
よろしければ感想・コメントよろしくお願いします。

君がため　2

こんな心算はなかったのに。
レイシアが立ち去ったあと、一人残されたユウコは堪えていた涙を止めることが出来なかった。
最後に綺麗に嘘を吐いて、それで終わりにしようと思っていたのに。

こんな無様な姿を見せたくはなかったけれど、せめて記憶に残る姿は毅然としていたかった。
でもそれは叶わないから、せめて何一つ忘れないように覚えておこう。そう思った。
月明かりよりも輝く金糸の髪も。
陽の祝福を受けた肌も。
真っ直ぐな琥珀の瞳も。
他の誰より温かかったその腕を。悲しませることしか出来なくて、心からの笑顔を見たことは何度あっただろうか。
皮肉を返すことしかせずに、どのくらいの時間を無駄にしただろう。
俯く頬に触れたのは、記憶に留めておきたかったから。
酷い言葉で終わらせる心算だった。
それなのに僅かに本音が滲んだ言葉に自嘲する。
――――貴方のことを、好きになれればよかった。
好きじゃなかったと言えなかった。
好きだと堂々と言える立場が欲しかった。
好きになってもいいと思いたかった。
そんな本音が滲んだ言葉を、果たして上手く取り繕えただろうか。
好きになるように努力したけど駄目だった。そう理解しただろうか。

誰より優しい人だから、これ以上重い荷物を背負わせたくはない。
思い出に残す価値もない女だと思ってもらえればそれでいい。

タカオの母殺しの調書を作っている間、ずっと嗅がされていた弱い香。
気が付いた時には身体の自由は利かなくなっていた。
何の目的でそんなことをしたのかなんて、どうでもよくなった。
信頼されていないことさえ悲しくない。ただそういう関係しか築けなかったと思い知っただけだ。
だから会いに来てくれたという事実だけで十分だ。
紗がかかった意識の下で、胸を締め付ける声を聞いた。
徐々に明瞭になる視界にその姿が映った。
それだけで、十分。
そう心に決めて酷い言葉を投げつけた。
なのに。
なんて脆い決意なのか。
遠ざかっていく背中を見ただけで崩れてしまうような、その程度のもの。
レイシア、と初めて呼んだ名前は取り消すこともできなくて。
助け出すと言われて歓喜に震えた胸を否定できない私は、どこまでも愚かだ。
望まないといった声は虚ろに響いたことだろう。

それでも、何度でも私は嘘をつく。
危ない目に遭わせたくない。
底の知れない沼に引きずり込みたくない。
だからお願い。
私の事を捨て置いて。

座敷牢の格子ごしに平伏した女官は、一見恭しくユウコに礼をとった。
「内親王殿下。お加減は如何でしょうか」
声の調子にはまったく気遣いなど感じない。形式的にそう尋ねるべきだから一応の体裁を整えているだけ。
レイシアが去って暫く経ってからやって来た女官は、能面のような顔に一切の動揺を浮かべず荒れた室内を見渡した。
外気を遮断するための布はレイシアがすべて取り払ってしまった。
今はとぐろを巻く蛇のような姿で床にうねっているだけだ。
自分が何をされたのか、ユウコはもう把握している。
しかし女官の顔を見ていると、それがどれほど仁義にもとる行いか分かっていないかのようだ。
「……悪くないわ」
「それはよろしゅうございました。では、帝がお呼びです。ご足労願えますでしょうか？」
「その自由は私にはないわね」
四方を囲まれ、座敷牢には出入り口らしきものはない。
ユウコには出入りの自由など全くなかった。
しかしそんなことはなんでもないと女官は笑う。
合図とともに室内の入ってきた二人の男の手には大鉈が握られており、何のためらいも無く木枠に鉈を振り下ろした。
「…随分、原始的なことね」
零れた声は今まで聞いたことがないくらいに乾いていた。
粛々と作業をする男二人と、それを女官が無感動に見守っている。
彼らにとって、ユウコはモノだ。
仮に火災にあったとときユウコにが逃げ出す自由はなく、焼死する

しかなかったのだろう。
その程度にしか思われていない。
犬に紐をつけるのと同じ感覚で、牢に囚われている。
砕けた木片が手にぶつかる。
そこは先程レイシアが口づけた場所。
痛みはさほどでもないが、大切なものが汚されたようで無意識にユウコは手をかばった。

「遅い」
「……申し訳ございません」
久しぶりに見た兄の顔は変わっていなかった。
そこにあるのは徹底した無感動で、ユウコにしたことの罪悪感など微塵も感じていないのだろう。
牢から出された後、女官はユウコを一瞥して汚いと言い捨てた。
何日か櫛を通さなかった髪はもつれていたし、香の副作用で流れた脂汗もあったはずだ。
気遣いも丁寧さも感じない手つきで身を整えられ、引きずるように連れてこられた。
すべては兄の支持かと思っていたが、兄の態度に変わったところは無い。
ここまで露骨なことをされれば、悟らないわけにはいかない。
ユウコの入内を受け入れられる人間など、内裏に一人もいないのだろう。
母を同じくする兄妹が睦み合うことを、感情では受け入れられるは

ずがない。しかしそれによって利があるから、意図的に目をつぶっているだけだ。
何かと帝に意見を求められてきたユウコが入内という形で政から遠ざかれば、より帝を御しやすくなると踏んでいるのだろう。
しかしすべてを隠し通せるはずがない。
帝という至高の存在を前にすれば一時的に忘れても、常に拒絶は裡に燻っている。そしてそこから発する暴力は常により弱い人間へと流れていくのだ。
「入内の日取りが決まった。報告しろ」
帝の命を受けた老臣はかしこまって祝いの言葉を述べるが、ユウコに向き直ったときには侮蔑の感情を露にしていた。
「善き日を占いまして…ああ、斎宮である内親王殿下には釈迦に説法ですな。日取りは２０日後となりました。ご異存、ございませぬな？」
「……」
周囲が音もなく嘲笑する。御簾を通して世界をみる帝には分からないのだろう。
神に仕える斎宮に対して釈迦に説法とは。
馬鹿にされていると腹を立てるのも虚しくなる。
「つきましては、入内の後に内親王殿下には斎宮位を辞していただかねばなりませぬ」
「……道理でしょうね」
「次の斎宮は…はて、適任者はいらっしゃいましたかな」
国の要職について、後任者も考えないまま退位を迫っていたのか。
適任者などいるはずがない。
もしいるのであれば、ユウコとレイシアの婚姻が決まったときにユウコは斎宮位を降りていた。
「……アレはどうだ」
「アレ…とおっしゃいますと……忌み姫ですか」
吐き捨てるような帝の言葉を周囲は的確に理解した。

忌み姫あるいは障りの姫と呼ぶのは、その名を呼ぶことさえ不浄と思われているせいだ。
ユウコはそれが我慢ならない。
今この国がリュミシャールからの侵略にさらされていないのは、ひとえにレイシアとその『忌み姫』のおかげではないか。
「ショウコはこの国の内親王ですが、リュミシャールの皇妃です。
他国の皇妃を斎宮にすえるおつもりですか？」
忌み姫などではなく、はっきりと妹の名を呼んだ。
しかし予想していたような拒否反応はなく一瞬居心地の悪い沈黙があり、すぐに合点がいったというように帝が口を開いた。
場を繋ぐ会話をするような軽さで。
「ああ。アレは今皇妃ではない。皇后だ」

言葉が耳を撫でただけで頭に入ってこない。
皇后？
どうして。
いつの間に。
愕然とした。
そんな妹の大事を、どうして知らなかったのか。
「いつだったか…まぁ暫く前だ。かの国から連絡があった。先代の皇后が没したので繰り上げてアレが皇后になると」
「正確な文面は！？」
急に大きな声を出したユウコに周囲が思わず引く。
今は入内が決まって政から一切の手を引くことが決まっているとはいえ、少し前までは実質的な政治を行っていたのだ。何か致命的な失策があったのかとざわめきが広がる。
「一体どうしたというのです。よくある話ではありませんか」
「四の五の言わずに！誰一人覚えていないの？」
参議の言葉を切り捨て睨みつける強さで視線を走らせる。
気圧されて部屋の隅から声が上がるまで、長い時間は掛からなかっ

た。
「確か……忌み姫…いえ……ショウコ・リーデル・オースキュリテ第二皇妃の立后に関し、こちらの承認を願い出るものであったと記憶しています。勅使はかの国の貴族で…名前は…記憶していません」
「返事はなんと送ったの？」
「返事は出していない」
答えたのは帝だ。
その答えにユウコは絶望を感じながらも、向き直って言葉を紡いだ。すべては手遅れだと分かっていても、言わずにはいられなかった。
「何故ですか？あちらは承認を求めてきたのでしょう？」
「形式だけだ。勅使がついたときには予定表にあった立后の儀まで終わっていた」
「それでも！意思を表明しなければ認めたことになってしまうでしょう？」
意義を申し立てたという事実がなければ、後日動くことが出来ない。妹の身は勿論心配だ。
しかしそんな常識さえ持ち合わせていない自国が危ぶまれた。
父である先帝が、何故ショウコを後宮に入れないという選択をしたのか。皇帝の外戚になるという機会を失っても、潰しておきたかった可能性を忘れてしまったのか。

しかしユウコの危惧をまるで分かっていない周囲は、宥めるような口調で言う。
「まぁ斎宮にするということで、あちらの立后の解消を申し立てては如何ですかな？」
「いっそのことその理由でこの国に呼び戻すことも出来るのでは？ついでに天帝の君を返してしまえば関係が随分とすっきりしますな」
世迷いごとだとしか思えない言葉が並ぶ。
そんなことをかの国が許すはずがない。
むしろこちらの未熟な政治と内政干渉を責め、国家間の約束の不履

行を訴えてくるだろう。
武力と合理性の国。今それは不文律の伝統よりも世界の基準となりつつある。
勝ち目のない戦を仕掛けるようなものだ。
一体いつになったら、この国は前に目を向けるのだろう。
先の不和を解消してから、この国は進んでいない。
安穏が保証されたことで、裡に閉じこもることを選んでしまった。
否、その自覚さえない。
世界は自分たちと歩調をあわせるべきだという傲慢を抱いている。

ユウコはリュミシャールの皇帝に会った事は無い。
しかしその手腕を見ていれば人となりは想像できる。
攻勢にでるには遅すぎた。急ぎ退路を確保しなければ、この国に先はない。
「いずれにせよ。お前にはもう関係がない」
考え込んだユウコに対して帝はあっさりと言ってのけた。
周囲も同調するように頷く。
「砂漠の皇子がお前の入内を認めると返答している。お前は余計なことに煩わされず、私の側にあればいい」

何に驚けばいいのかわからない。
何に時間を割けばいいのかわからない。
ただ、この国だけでなく自分自身も追い詰められていることを自覚しないわけにはいかなかった。

君がため　2（後書き）

感想に飢えています。よろしくお願いします。

惜しからざりし、命さえ

「使える伝手は何でも使う。思いつく限り端から並べろ」

館の使用人は驚きそして慄きながら主人を見上げた。
傲然と言い放つこんな姿を見たことがない。
これではまるでリュミシャール先代皇帝のようだ。
レイシアは穏やかといえば聞こえは良いが、苛烈を極めた父や若いながらも当代一の名君と誉れ高い兄に比べれば凡庸とさえ評された。
また周囲も生まれ育った環境を考えれば、レイシアにそういった能力を求めなかったともいえる。
そのような評価はすべて間違っていたと断言できる。

単に、それを必要夜する状況になかったためだ。
奇しくも最も欲するもの――――ユウコは労せずとも与えられた。
それがあればそれでいいと怠慢の上に胡坐をかいていたのだろう。
あるいはそれは自分は父や兄とは違うのだという、輪から外された者なりの矜持だったのかもしれない。
しかしそんな見栄はかなぐり捨てて次々と指示を与えていくレイシアの姿は、良くも悪くも酷くリュミシャール皇族らしいといえるだろう。
お仕えしていた方は、このようなお方だったのか。
ある種の感動をもって、平伏して命を受けた。

人を下がらせた自室で、レイシアは行儀悪く爪を?んだ。
最善の手は打っているつもりだが、悔やまれることばかりだ。
内裏から戻ってまず考えたのは、どの程度時間的余裕があるのかということだった。
はっきり言ってレイシアはこの国の慣習やしきたりには弱い。

しかし帝の婚儀、しかも相手が内親王では倫理的問題含めてそれ相応の準備が必要だろう。
そうだとしてもリュミシャールまで速度のみを優先して手紙を出して、船旅で1月はかかる。更に返信を待てば最短二月。これを待ってから動くことは出来ない。
結局レイシアが選んだのは故国に対する一方的な通告だった。これは奇しくもレイヴスがオースキュリテに対して行ったショウコの立后の報告と同じ手段である。
故国に対して約10年ぶりに送った手紙は、自分の行動で何か国に不利益になることがあったら遠慮なく切り捨てろということとその場合関与した者は一人もいないという証文だ。
故国から送られてくる手紙はすべて検閲されている。しかし定石であるが故に、当然密書を交わすための手段は用意されている。
それを初めて使うのが絶縁状とは、洒落にもならない。
兄の取り巻きであるシンレットなどはあれでいて結構皇族に対して世話焼きであるから、呪詛と怒りを織り交ぜつつも対策を練ってくれるだろう。
兄がどのように反応するのかはわからない。交流の無い兄弟であったので、そのあたりはあまり期待しないほうが良いだろう。そして兄が動かなければ母が動けるはずが無い。
結局、故国からの援助は期待できないしていない。邪魔立てはしないだろうと推測するしかないのが現状だ。

「……こんなことなら、まめに連絡をしておけば良かったか」
「まったく、そうでございますねぇ」
「！」
完全な独り言にあきれたような返答があり、驚いて首をめぐらせる。
「意地を張らずにあちらとご連絡を、という私の言葉を無視し続けたのはどなたさまでございましょうねぇ」
いつの間にか部屋の片隅に座り込んでいるのは、疾うに初老の域を

超えた老女だ。
久々にみたその顔に、都合の悪さもあいまって目をそらす。
「生きていたのか……ヌゥ」
「はい。お嬢様から殿下のことをくれぐれもよろしく、とおおせつかっておりますれば」
ヌゥと呼ばれた老女は背中が曲がり杖無しでは歩けないにもかかわらず、実に巧妙にレイシアを部屋の隅に追い詰めた。
「お前にまで出て来いと言っていない。下がれ。張り切りすぎるとそれが元で死ぬぞ」
「嫌でございます」
「お前…主命を……」
「私の主はお嬢様でございますれば」
皺の中に埋もれた目を細めてヌゥはにたりと笑った。
ヌゥの言うところのお嬢様とは、レイシアの母であるリュミシャール皇太后だ。いい加減若くも無い母を衒いもなくお嬢様と呼べるのは、もうヌゥだけだろう。
母が父に嫁いだときから腹心の懐刀であったヌゥはレイシアを案ずる母によって共にオースキュリテに渡ってきていた。
しかし母の監視をうるさくも重くも重い、また捻くれた自尊心もあって最初の数年以外は遠ざけていた相手だ。
しかし。
「つい昨日まで婆や婆やと泣いていた殿下が、まぁ一人前に男の顔になって」
「……！」
レイシアは低くうめいて頭を抱えた。
何かあるとすぐにこれだ。敵う訳が無い。
レイシアが国から連れてきた者を遠ざけ、オースキュリテから支給された者を用いていたのは、ヌゥの存在が理由でもある。
何かあればリュミシャールの者はすぐにヌゥに報告する。決して清いばかりの生活を送ってきたわけではない成人男性にとって、母親

にも似た存在に色事が筒抜けなのは歓迎できない。
「お嬢様もお喜びになるでしょう」
ほくほくとヌゥは笑うが、レイシアはそう思えなかった。
暗い思いが頭を支配しそうになるがそれを振り切って、思考を現実に引き戻す。
「それで結局、お前は何をしに出てきた」
「殿下のご尊顔を拝するためでございますよ？」
「……悪いが、それなりに忙しいのだが？」
「冗談でございます」
からからと笑う相手に疑いが強くなるが、次の言葉で吹っ切れた。
「もしご入用なら、兵を動かせますよ」
その数、一万。
日常の会話を楽しむような調子で言われらので、言葉を租借するまでに時間がかかる。
「……一万、だと？」
ちょっとした地方遠征に向かえるほどの数だ。
それほどの数のリュミシャール軍がこの国に潜んでいるはずが無い。
老人の戯言と聞き流そうとしたレイシアに、ヌゥは尚も言い募る。
「かつて、リュミシャールとこの国が対立していたとき、時の皇帝陛下は誰でしたか。そしてその後を継いだのはどなたですか。よもやお忘れではございますまい。そのお二方が、漫然と時を過ごされるはずがありますまい」
膝でにじり寄るヌゥは嘘をついている様子は無い。
「特に、レイヴス様は…皇帝陛下は、有事の際に殿下がご無事であるよう、逃げ道を確保しておいでです」
「では…本当に動かせるのか？一万の兵を」

「足す、四千」
突如割り込んできた声に驚いたのはレイシアだけだった。
扉にもたれるように腕を組んで立っていたのは、いるはずの無い友

人。
「…お前っどうして！」
おや？と首をかしげる榊が顔を向けた先にはヌゥ。
嫌な予感に視線で促すと、当然のようににたりと笑う。
「私がお呼びしましたので」
「……っ！」
言葉にならない叫びを上げてレイシアは額を押さえた。
内裏でユウコとレイシアを会わせる為に、榊が一役買っていたのは知っている。そのせいで軟禁状態にあったが、結果的にレイシアがユウコの入内を認めたことで、むしろ功労者として解放されたはずだった。
これ以上巻き込むわけにはいかない。
そう決めたからこそレイシアは榊にこれまでの感謝と決別の手紙を送った。
もう会うことは無いと思っていたからこそ、涙交じりの、思いの丈を込めた手紙を――――！
「っぁ――――……！」
恥ずかしさで死ねるなら今だ。
女性への甘い言葉はいくらでも言える。恥も衒いもなく泉のように湧き出てくる。
しかしこれは別物だ。
何に当り散らすこともできない歯がゆさにレイシアは床に沈んだ。
それを宥めるように榊はレイシアの背中を軽く叩く。
「……お前、どうして来た」
危険だから来るなと、もう会わないと言ったはずだ。
地位も身分もある男なら、それがわからないはずが無い。
しかし榊はのんびりと言う。
「仕方ないだろ？」
打算が無いわけではない。
しかしそれを込みにしても勝算の悪い賭けに乗った理由。

「僕は君が好きなんだよ」

「兵一万と申しましても、もちろん御国の兵士ではございません」
「傭兵、か？」
それでもさしたる問題は無いが、やはりいざというときの統率は難しいだろう。
考え込んだレイシアに、榊はその先を引き継いだ。
「いや、オースキュリテの臣民、だろう？」
信じがたい言葉だが、ヌゥは肯定を示すように頷く。
オースキュリテの民が、リュミシャール皇族である自分に味方する？
「説明、してくれるか？」
幾分低くなったレイシアの声に、榊は痛みをこらえるように頷いた。

「この国は病んでる。時期は…おそらく１０年前、君と忌み姫、否、君とショウコ内親王殿下が海を渡ったあたりからだと思う。
元々、この国の政治体制は閉鎖的だ。地理的にも人員的にも。間接的にリュミシャールと戦ったのは、国の中核で無い周辺民族や協力国だった。ここまでは知っているだろう？」
榊にとっては身内の恥だろう。
それでも偏見無く言葉を紡いでいく。
「一応和平が成って、まぁそれで終われば良かったんだけどね。
今度は戦の恩賞をめぐって諍いが起きた。周辺地域の領主に対して参議の一人が、勝利の暁には国政への参与を認めると証文を書いていたと言う。当然国はそんなものを否定した。既得権益を侵されたくないのはどこも同じだな。

水掛け論になった。でも結局は…両当事者が死んで、話自体なかったことになった」
「それ、は……」
「事故だ。そうなっている」
なっている。
その言葉の裏の意味。
「なんでそんなことになった？同一民族だろう？いくらでも妥協点はあったんじゃないのか？」
「なら君は、家族となら完全に理解しあえるのか？」
強く意識した言葉ではなかったのだろう。
しかしそれは榊が意識した以上に、レイシアに刺さった。
理解できるはずがない。むしろ赤の他人のほうがまだ分かり合えるとさえ思う。
「…悪かった」
「いや、いいよ。
話を戻そう。その後徐々に朝廷から地方が離れていった。当然だな。しかも大きな戦いが収束した直後だったから、外部にそれが気付かれずに済んだ。……問題を先送りにしていたんだ。俺を含めて。
今回の帝とユウコ内親王殿下の婚姻は、正直に言えば認められない。だが、離れていった人心を引き戻すためには、神憑ったことをするしかない。主義も主張も目指す利益も違う、僕から言わせればこの国の人間だって北と南では容貌だって違う。そんな集団が唯一共有しているのが、神話上の祖先だ」
「ちょっと待て。それは……」
「知っているか？イザナギとイザナミという2柱の神話を」
兄であるイザナギと妹のイザナミが馬鍬って出来た国。
兄である帝と妹のユウコの婚姻でそれを模倣しようというのか。
「……狂ってる」
あまりに醜悪な考えだ。
それで人心が戻ると思っているなら、人を馬鹿にするにも程がある。

特定の神を持たないレイシアから言わせれば、そんなものに頼って国政を行おうとすること自体狂気の沙汰だ。
先程から黙り込んでいるヌゥにしても、こみ上げる嫌悪感を抑えるように顔を背けている。
「狂ってるか。確かにね。でも同調する者も一部にはいる」
「そんなことを、帝が考えたと？いくらなんでも……」
「いや、あのお方はそんなこと興味ないだろう。僕の口からは何もいえない」
「……」
「睨んだってれは駄目だ。……ああ！悲しげな目をしたって駄目だ！それを口外できるのは帝かユウコ内親王殿下だけだ！」
そこまで言われてしまえば仕方がない。
とりあえずこの場は諦めて頭の片隅に疑問を保存した。
「……お前はいいのか？家は…どうする」
榊の家が朝廷を裏切ればどれほどの関係者が処罰される分からない。
しかしそんな危惧を榊はあっさりと切り捨てた。
「君に心配されるようなことは何もないよ。それなりに朝廷の弱みも握ってるし、余程馬鹿なことをしない限り朝廷は家に何も出来ない」
家には影武者を置いてあるから今日も問題ないと飄々と嘯く友人の顔をレイシアはまじまじと見つめた。
「何？」
「いやぁ……」
限りなく黒に近い灰色は白になるらしい。
「権力って、怖いな？」
「何を今更。権力は便利だよ」
怪訝な顔をする榊に、そうですねと頷くしか出来なかった。
このあたりは身分は高いが地位を持たずに生きてきたレイシアには欠けている感覚だった。
気の置けない付き合いをしているが、友人が名家の御曹司だと実感

するのはこんなときだった。
ずれているのは自分なのか相手なのか。
判断に困るところだなとふと思った。

畳の上に乱雑に広げた地図は、実は相当緻密に地形が書き込んである。
レイシアとしてはこんなものをヌゥが黙って所有していたことには素直に感謝できないし、榊にしてみれば国防の観点からは看過できないが、とりあえずそれらすべてに目を瞑る。
「で、そうする？」
榊がすっと指で地図をなぞる。
その軌跡は都から山の中へそして川へまた山にというように蛇行してはいるが、最後には小さな港にたどり着いた。
「この経路を辿れば国外に出られる。領主たちも助けることはあっても裏切りはしない。海に出れば、あとは協力国が動いてくれる」
そして最後にはユウコを連れてリュミシャールに戻ることが出来るだろう。
ヌゥはおそらくそれを望んでいる。
そうすればリュミシャールにはオースキュリテの皇位継承権者が二人。人質としての価値は計り知れない。
何も言わないレイシアに、榊は窺うような視線を投げる。
「……後悔するよ」
「しない」

そしてレイシアがなぞった線は山の中をひたすら抜けて、南へと下りある一点で止まった。
「目的地はここだ」
考えに考え抜いて、ここしかないと判断した。
勿論逃げるだけならリュミシャールに行けばいい。
しかしそれではユウコの意思を殺してしまうことになるだろう。そしてこの友人を見捨てることになる。そんなことは最初から選択肢の中にない。
「……殿下…」
ヌゥは不満げにレイシアを呼びつつも、仕方がないと大きくため息をついた。
一応の了承は取り付けた。
故国への対応はいいように取り計らってくれるだろう。
一つ深く息を吸って、計画をさらう。
出来ることはすべてやった。
あとはその場その場で吉と出るか凶と出るか。そんなことは誰にも分からない。
「決行は？」
幾分緊張をはらんだ榊の声にレイシアは笑う。
唯一可能性が残された日。
その可能性を作るために、張り裂けそうな思いで了承したユウコの入内。
「決まってる」
朝廷が作り出した箱庭。偽りの延命措置。
そんなものは、破壊してやる。
「入内の日。その舞台。それ以外には有り得ない」

この腕に、君を抱きしめる。
その権利を、奪いにいく。

惜しからざりし、命さえ（後書き）

ようやくレイシアが脱・へたれです。
感想・コメント・一言・レビューすべてお待ちしています。

惜しからざりし、命さえ　2

ふわり。
ふわり。

静かに積もり続ける白。
この世の再生を迎えるために、すべてを無に帰するような白。
遠くの山並みも、近くの軒も。
すべてに区分なく贔屓なく。
そんな風に、なりたかった。
そんなような、男性(ひと)だった。

部屋の中央に置かれた衣装台には、入内のための華やかな衣装が掛けられている。
色目は紅(くれない)の匂と一般に言われる五衣唐衣裳(いつつぎぬからぎぬも)。衣で匂といえば同色が徐々に濃淡を示していくものを表す。
これ以上ない祝いの日にこの鮮やかな色目を用意した気持ちは分かる。
着る者が晴れ晴れとしていたら、外の白に映えてさぞ美しいことだろう。

ユウコはぼんやりとした頭でそんなことを考えた。
レイシアが会いに来たあの日から、どっちつかずな心は決断を拒みずるずると先延ばしにしているうちにいつしか選択肢はなくなって

しまった。
妹として、兄を案ずる。
斎宮として国を憂う。
個人としてレイシアを想う。
正しさの尺度なんてものをユウコは知らない。万人共通のそれがあればどれほど便利かとは思うが、おそらくそんなものは世の中に存在しないのだろう。
だから悩むし間違う。
それでいいと人には言える。
しかし翻って自分はどうだろうか。
間違いたくはない。正しい道を選びたい。だって怖い。
「……愚かね」

逃げるならば今しかない。
自由を奪うために使われていた香は、今日の日に備えてここ数日は控えられていた。
逃げる？
どこに？
ユウコはここ数日止まらない手の震えを隠すために、強く拳を握り締めた。
こみ上げる吐き気と頭痛をやり過ごす。
結局、意識がなくなるほど強くないというだけで、香は確実にユウコの行動を制限している。
兄がこのことを知っているのかは分からない。
諾でも否でも嫌いになってしまうことが分かっているので、何度か顔を合わせても話をしようとは思わなかった。
知っていると言われたら、よくもこれほど酷なことをと思ってしまう。
知らなかったと言われたら、よくそれほど無関心でいられるものだと思うだろう。

ため息をつくとその音が思いのほか大きく響き、慌てて周囲を見渡した。
そして衣装の奥の鏡の中に、疲れた顔が映る。
嘘つきとユウコを詰る自分の顔。
兄とよく似た面差し。それは母の若い頃によく似ている。
本当に兄が求めているのは、ユウコではない。
そんなことには本人もユウコもずっと昔に気が付いている。ただそれを口に出さないのは、最後の理性だ。
幼い頃の傷は今も兄を苛んでいて、その兄はやり場のない感情をユウコにぶつけることで傷から目を背けている。

鮮やかな衣装を見ているのが辛くなり、人の気配が無いことを確認してそっと部屋の外に滑り出る。
冬の空気は乾いていて、驚くほど軽く木の扉は横に滑った。
突き刺すような冷気に誘われ、普段は絶対に行くことの無い濡れ縁に立つ。
御簾ごしでない庭園を見るのはいつ以来だろう。
いつから外を見るのにもあたりを憚るようになったのだろうか。
そんなことを疑問にも思わないほど、それが内親王としての当たり前だった。

白い世界の中で、庭園の隅に零れる紅が目を引いた。
他のどの草木も眠るこの季節に、雪を待っていたかのように咲き誇る寒椿。

雪のような人だと思った。
側に居るだけで別の世界にいるように、そのときだけは周囲のあれこれから解放された。
何にも縛られることなく、あるがままに生きていける人。
憧れていた。
焦がれていた。
レイシアの側でだけ、呼吸が出来た。
そうありたいと願った理想だからこそ、巻き込むわけにはいかなくて。
手を伸ばしてみればきっとこの指の先で消えてしまうのだろう。
降り続く雪は決して掴むことは出来ない。
指先で融けて、その形を残すことはない。
それでもユウコは待っていた。
逢いたいと口にすることは出来なくて、気まぐれな訪れの時には酷い態度の鎧を着て。
だからこんなにすれ違ってしまったのだろうか。
身動きが取れなくなるまで、追い詰められてしまったのだろうか。

孤高の紅と気高い白。
それがどうしようもない自分を責めているようで、思わず両手で顔を覆った。
助け出すと言われて、どうしようもなく心が震えた。
その後に兄に入内は承諾されたと聞かされても、真摯な約束を疑う気持ちは起こらなかった。
もう時間は無い。
考えなければいけない。
国のことを。
兄のことを。
斎宮の勤めのこと、内親王の務めのこと。
皇后になったという妹のこと。

レイシアのことを。
そのどれかを取れば他が崩壊してしまう。だからこそ考えなければいけないのに、頭は思考を放り出してしまう。

「ユウコ様」

静かな、けれど断固とした声音で呼びかけられ引きつった顔を向けた。
気が付けば先程までユウコがいた室内には数人の女官が揃っている。
「御召し変えのお時間です」
部屋の中央に鎮座する五衣唐衣裳。
滑るように衣装掛けから外され、その間に長い髪がこれでもかとばかりに梳かれる。
焚き染められる香に、髪に肌に塗り込められる香油。
華やかな装いのための準備はまるで自分を作り変えられていくようだ。
一刷毛、一刷毛。白粉が呼吸を奪っていく。
一筆、一筆。顔に色が乗るたびに個人が奪われていく。
立ち上がることを促され、肩から衣装が滑り落ちる。
変わりに纏った五衣唐衣裳は重さは変わらないはずなのに、ずっしりと重かった。
「どうぞ」
檜扇を渡しながら女官が姿見に掛かっていた薄布を外す。
「……っ！」

そこに映ったのは若い頃の母にそっくりの顔。
そして醸し出される悲壮さは兄にそっくりだ。
「さすがはこの上ないご血筋の」
「お美しゅうございますよ」
「主上のお見立てのお色がなんとお似合いになることか」
次々に浴びせかけられる賛辞の言葉が遠い。
それでも長年の習慣で、顔には徐々に微笑が浮かぶ。
心など伴わなくても、人は笑える。そんなことは物心ついたときから知っている。
口角を引き上げて、細く空気が通るだけの隙間をあければいい。
そうやって笑っていることが、内親王としての義務だ。
長年続けてきたことが、今はこんなにも難しい。
いちいち意味を拾い上げてしまう耳を塞いで、叫びだしてしまいたかった。
「――――っ！！」

「晴れ舞台に臨むお顔では、ございませんわね」

穏やかな声と微笑で、しかし有無を言わせぬ強さで女官たちを部屋から追い出したキョウコは、手ずから火鉢を引き寄せユウコに暖をとらせた。
「この部屋は凍えるように寒い。なぜ火を持ってこさせなかったのですか」
「……。」

そんなことを頼めるはずも無い。
女官たちは己の職分以上にユウコに係わるつもりなど無く、むしろ侮蔑の表情を隠そうとしないのだから。
自然に、誰のものとも決まっていない些細な仕事は見過ごされてゆく。
ユウコとしても、今までそしてこれから自分が行うことになる行為を思えば、敬意を持って仕えよとは口が裂けても言えなかった。

黙り込んだユウコにため息を吐き、キョウコは庭に視線を走らせた。
「ユウコ様は寒椿ですわね」
「……は？」
「ある二人の殿方がおっしゃったのです。ユウコ様は寒椿だと。ほかの草木がただ耐え忍び春を待つ中で、一つ鮮やかに花を咲かせる人だと」
「買い被りでしょう。私は…それほど強くはありません」
膝の上でそろえたこぶしを握り締める。
白の中に咲く紅。
そんな鮮やかな存在ではない。
自分の本質は地に汚れる落葉だ。
「それに…そうだとしても…そんなものにはなりたくはありませんでした」
望んだ姿は雪。
周囲に歯向かうように咲く花ではなく、次の季節への支度を促す自然の理。

「我侭、ですわね」
「我侭？」
感傷を叱責するように、珍しく強い口調でキョウコが切り捨てた。
「私はユウコ様になりたかった。否、今でもなりたい。成り代われるものならば、その立場を私にくださいませ。主上に誰よりも必要

とされ求められるその立場を、私にくださいませ」
「キョウコ様……」
「私がどれほど望んでも手に入らないものを、持っているのにちっとも幸福そうでない。悲劇の渦中にでもいるような。そんなユウコ様は我侭です」
「そんなっ！」
望んでもいないものを与えられて、それを喜ばなければ我侭だろうか。
それは違う。
少なくともそこまで己を偽る必要は無いはずだ。押さえ込むことは必要でも。
「私が我侭だというのなら…それはこの立場を望まないことではありません。
それは……内親王としての立場を重く……思っていることです」
傍から見れば支離滅裂な言い分を、キョウコは冷ややかな顔で聞いた。
これ以上無い生まれを疎ましく思うなど、理解できるはずも無い。
我侭だと言われても仕方が無いのかもしれない。

「重い、ですか」
キョウコは一旦言葉を切ると、静かだが強い瞳でユウコを見据える。
「重いだけなら耐えてください。ユウコ様が強くなれば済むことでしょう。
主上が背負っているものはそれよりも遥かに重いのです。そんなこと、ご存知でしょう？」
キョウコの顔が一瞬歪む。

「主上は、私には…背負わせて下さらない」
背負われたいわけではない。
本気で相手を好いたのならば、その荷物を背負いたいと思う。

そんなキョウコの心情は手に取るように分かる。
それができない身の上を、それを求められない己の不甲斐なさを、悔やんでいることも。

「もう、おすがりするほかないのです」
好いた相手のために、憎いであろう恋敵に頭を下げられる。
兄がないがしろにしているのは、これほどまでに深い思いだ。
「私が主上のためにして差し上げられること。ユウコ様におすがりするほかないのです」
何を言うことができるだろうか。
これほど純粋な想いに対して、ユウコは言葉を持たない。

何も言うことが出来ないまま、ユウコはやって来た侍女たちによって引きずられるように婚儀の席へ誘われた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7380e/

雪待ちの花

2011年5月27日17時12分発行